匆忙貴官を府内に延きて舶を侑むる能わざるを以て恨と爲す此に野味を獻じて聊か寸志を表すと中佐乃ち使者三人に酒錢十五吊文を與へて去らしむ彼等は酒錢を得れば皆之を同僚に分たざる可らず後日將軍の僕頭中佐に問うて曰く前日與ふる所の酒錢果して幾何ぞと中佐其錢を分つの均しからざるを知り笑うて曰く是豈言ふを須ひんやと彼れ忸怩として退きけり彼等皆將軍の僕のみ而して皆四品五品の官帽を頂きて以て威福を張り富を私門に積み弊竇尤多しと云ふ聞く此日賊十八人を正門外の刑場に斬れりと

觀施療院

吉林城外に蘇格蘭の教會より派遣せられし一醫師ありドクトル、グレークと云ふ着後一日シエルン氏の添書を携へて往きて之を訪ふ家は東萊門外二里許の地に在り市中に施療院を設け日に五十人を限りて施療し午後一時より五時に至るまでは家に在らず其妻君二子と家に在り中佐を迎へて之を客室に延き氏の歸るを待つ既にしてグレーク氏歸り中佐の手を握りて曰く嘗て大名を新聞紙上に知る圖らざりき此に相見えんとはと因て酒食を命じて待遇甚悃なり氏は嘗て吉林に遊ぶ者前後六回其初め支那人の旅店を貸す者さへなかりけるが往年萬類を排して醫術を開業しけるに一日市中を往來して忽ち兵卒數人の爲に捕へられ城外の老樹に縛せられて杖楚亂下、皮敗れ肉爛れ奄々殆んど死しけり幾に免るゝを得て歸國し實を以て公使に訴へ清國に照會してより已に二年事未だ落着せず去年氏再び此の地に來り城中の一店を借りて施療院を開きけり初は外醫を喜ばず備さに艱苦を嘗めけれども日を經ること久しうして支那醫の匕を投じたる大患をも治して効ありけるより漸く權門豪族の信ずる所と爲り今は醫道大に行はれ復た杖楚の憂なしと云ふ其忍耐欽す可きなり越えて二日正午同氏の饗に赴く座間中佐が途中熱を患へて醫藥なかりしことを聞き驚愕措かず曰く千金の身君請ふ輕んずる勿れ疾病豫め測る可らず必要の藥劑數種を携ふるを可と爲す僕請ふ調劑せんと乃ち相伴うて城中の施療院に至る院は支那家にして規模猶小なれども五十名の患者は門に滿ちて診を待てり氏號を逐うて之を診す親切叮嚀赤子を視るが如し施療院に支那人の稍醫事を解する者三人あり一人は調劑、一人は助診に從事しけり中佐既に藥を得て將に辭し去らんとす氏匆忙中出て門外に送る中佐固辭す氏曰く支那人をして外國人を待つの禮を知らしめんと欲するなりと送りて門外に至り叮嚀な手を握りて別れけり氏施療日に五十人陰德如

此し而して猶城市の間を行けば集觀嘲罵止まず氏の妻子の如き未だ嘗て門外に出でずと云ふ

將軍贈餞

十二日將に明日を以て發せんとす乃ち將軍衙門を訪うて別を告ぐ將軍の秘書官曰く既に寧古塔琿春に向て公文を發し沿道の驛站をして驛車一輛を出さしめ宿泊草糧の便を圖らしめたり且つ此地より一士官四卒を出して護送し沿道駐屯の兵營をして各兵四五人を出さしむべしと此の夜吉林將軍使を遣はして洋製鐘詰十箇を贈るドクトル、グレーク氏も又た鐘詰菓實及び砂糖麵包、印度茶等を贈る時に病臥十八日に及びしと吉林に入りて待遇一變せしとの爲に多く旅銀を散じ囊中餘す所の銀甚だ少し因て烏港に通商する一豪商を訪うて黨貨と清銀とを交換せんことを求むるも應せず詮方なければ空囊程に上らんと決心しけり十三日未明一士官四兵卒果して至る兵卒ハ吉林練軍三起馬隊の兵にして其三卒は八旗の籍に屬し五品六品の官を帶ぶる者なり士官の官位姓名を馬隊哨官小隊長五品花翎郎補防禦祿恒と云ふ年四十餘伊犂新疆の亂起りし時屢戰功あり藍翎を賜ひ後奮戰賊の首を斬る十級功を以て花翎を賜ひけり中佐裝を理めて待つこと久しきも驛車至らず屬使を遣はして之を責む小頭來り叩頭罪を謝して曰く今朝小雨あり思ふに必ず程ゑ上らじと乃ち怠りて期を誤れり驛馬は放ちて松花江外三十清里の野に在り往復大約六十里河を渡る者二時を費す太た多し請ふ少しく期を緩くせよと期を誤る如此し亦奈何とも如何可らず乃ち明朝を期し小頭を戒めて曰く烈風雷雨亦必ず途に上らん汝再び期を誤る勿れと小頭唯々命を受けて退く

發吉林城

五月十四日夜來の雨未だ止まず晴雨計曰く可と乃ち早起裝を理む昨日小頭拂曉車を送らんことを約す然れども其必ず期を誤らんことを恐れしに果して午前九時に至りて車漸く至れり兵卒未だ至らず待つこと久しうして亦至る因て午前十時を以て吉林城を發するを得けり此日兵卒は白地に黑天鵝絨の緣取りたる袖無羽織の如き號衣を着て胸背に天鵝絨もて三起馬隊と縫ひ帽は八旗原籍の官帽を戴きけり去れば八旗に在ては士官練軍に在りては兵卒なり勇軍の號衣は袖ありて八旗のは袖なし八旗ハ概皆妻子ある月七兩(我拾圓許)馬を飼ひ妻子を養ふ皆其中に在り帶びる所の銃は皆米國製ウキンチエストル連發銃にして彈藥ハ帶に在りと云ふ雨後道路泥濘街路も亦淤澤を

行くが如く朝陽門外道路二あり一は機器局近傍の渡頭を渡る者稍々近し一は齊々哈爾道の渡頭にして遠し遠き者を取りて渡頭に至り護送士官祿恒と此に會す直に江を渡りて前岸に達す左は齊々哈爾道右は寧古塔道なり此より以南琿春に至る迄群山重疊道路嶮惡なり山間溪谷を行く屢溪流を渉る此の邊山に樹木多く山態甚だ美處々に杏李の花開きて溪山一路殊に蕭索ならず此の日は吉林より九十清里なる額赫穆站に達せんと思ひけれども發程の時間遲かりしより達するを得ず行くこと五十清里午後五時一寒村に投じけり

○村家烟話

此の日官吏を護送して寧古塔より吉林に歸る二兵卒と此の村に遇へり彼等は靖邊親軍馬隊の兵なり村店に入りて中佐護送の四兵と與に阿片烟を喫し初めたり昔日は官吏軍人嚴に阿片烟を喫するを禁じたりしに今や清國北門の鎖鑰を守る棟軍しかも精棟を以て稱せらるゝ兵卒も亦阿片烟を喫するを見て誰か驚かざらん蓋し前日の英商の阿片を印度より輸入するのみにて價極めて貴く一兩目七八吊文なりけるより兵卒なんぞの手に得らるべくもあかりけるが其後支那政府は阿片輸入を防がんが爲に四川等適當の地方を擇びて盛に阿片を製せしめけるが

軍人亦喫ニ片烟一

其結果は外品輸入を防ぐを得ざるのみならず內外の阿片價額忽ち下落して一兩目一吊文乃至八九百文に過ぎざるより需用頓に增加し清國到る處之を喫せざるものなく烟毒國內に滿つるに至れり去れば前日吉林の喫烟者百の二三に過ぎざりし者今や百中の六七十に及び兵卒猶且つ片烟を嗜まざるものなし一國元氣の消長之に繫る嘆ずべし嘆ずべし

驛站荒涼

十五日一大村を得て小憩す此の地棟軍騎營一哨あり盜賊に備ふる者なり哨官來り訪うて曰く已に將軍の命を受けたり四卒を出して護送せしむべしと此の日此を去る遠からざる額赫穆站に投宿せん筈なれば明朝兵を彼處に出さんことを告ぐ哨官の八旗の參領にして紅頂子の官帽を戴けり此の村賣買あり麥を買うて乃ち發す山を上りて溪流を渉る者三水深さ皆四尺許山に樹木多く杏李の花盛に開けり午後一時半額赫穆站に達す驛舍に入りて見れば一老人一少年の外人寂として人なく廐には馬なし外郎小頭等は何地へか行きつると責問へば今迄は此に在りて少年を塀の上に登らせ遠見させつゝ酒飲み居たりしが少年只今士官兵卒の來れりと告げしに塀を越えて逃げ去れりと云ふ此は客を待つの煩を避けしにや

あらん老人は大師父なり不都合なる事よと責めければ是もやがて逃去りけり殘れるは少年のみ馬に與へん草もなく人の食はん物もなし幸に麥は準備し來りけれども全村をさがして麩子を得る能はずやう〳〵粟幹を得しのみ少年に命じて豆腐と醬油とを買はしめて總に夕食を了りけり此の驛の役人等い殊に亂暴なる輩よて驛舍に備ふる馬二十五頭の内十頭は既に餓死せしめ殘る十五頭も飢ゑて骨と皮とのみ若草の萌出る頃なれば遠く草野に放ちて驛に在らず驛中又一車輛なし少年の給料は一月一吊文なるが四月間も受取らずして碌々物も食はずとて色青ざめ居けり政府の與ふる所他驛と異なるごとなくして驛馬は餓死し少年は食はず皆外郎小頭等の飲且つ食ひしなるべし地方長官は何とて斯く亂暴なる驛員を免せざるにやいと訝かし

盜賊横行

翌朝將に發せんとして車なし吉林より來りし驛車に多く錢を與へて次驛に至らしめんとするも應せずして歸り去り護送の兵卒等全村を求めて一車なければ中佐今は詮方なし車上の荷物盡く此に棄てゝ馬に上らんと云へば士官倉皇狼狽して又も全村を奔走しやう〳〵牛車一輛を牽來れり車夫の言ふまゝに錢を取らせて出立す時に午前十時なり前村の護送兵四騎至る皆腰に傘を挾めり吉林の兵も亦然り雨至れば馬上傘をさすなるべし此の兵護衛とは云へど此處に休み彼處に憩ひて隨意に跟伴せり行くこと三十清里許一小村を得て小憩す牛車は一時間能く七清里を行き驛馬に比すれば早し此より溪狹く馬首漸く仰ぐ遂に山上に至る山下より高きこと大約一千尺怪岩聳立し溪水路に滿ちたり山を下れば樹木鬱々遠望する能ハず此の間盜賊出沒し往々行旅を殺掠すとて護送兵注意する者の如し下りて山腹に至り一驛車の歸り來るに會す車夫車を停めて兵卒と語りて曰く此を去る大約六十清里の地琿春より吉林に銃器彈藥を護送する士官兵卒一宿せしに夜半盜賊來り襲ひ家を燒き人を傷けて銃器彈藥を奪ひ去れりと兵卒之れを聞きて愕然震慄殆んど人色なし日暮山下の一孤屋に至る草秣あし又深林を過ぎて行くこと五清里許一孤屋に投ず行程四十五清里なり此の地四面皆山一隣家なし中佐例に因て馬を休むる者三時間粟稈を與へて後馬に飲かはんとて溪水を問へば店内の少年曰く此を去る遠し溪間に下らざる可からずと一人の隨伴する者もなければ少年を導者と爲し馬を牽ゐて水を求む既にして店内に歸れば主婦傍人を顧みて曰く膽子大此の邊山間の村落は馬賊と約し貧富に應じて年々金穀牛

村民納二金穀牛羊於賊窟一

羊を賊窟に致す若し約に背きて物を贈らざれば賊來り襲ひて人を殺し家を燒く故に敢て或ひは賊の命に違ふ者なく馬賊實に此間の大王なりと云ふ此の邊の人民は斯る事なぞ憚らで公言しけり翌十七日雨あり兵卒果して馬上悠々紅傘をさして行く去りとは優長なり行くこと二十五清里拉哈站に投ず道路尤も險惡なり此の日途上一騎の鞭を揚げて吉林に赴く者に遇ふ是れ馬賊夜襲の警を報ずる者なり聞く拉哈站の西北山中實に賊の巣窟と爲す賊は山東人多し皆勇悍にして携ふる所の火器精良なりと此驛に又騎營一哨あり亦盜賊に備ふる者なり此の夜委員來りて額赫穆站の荒涼を說く驛員懶惰無頼にして往々公信を停滯し不法尤甚しと前日の模樣にても左もあらん不法如此して罰せず怪しむ可らずや十八日道路稍善し丘陵を上下して行くこと廿五清里許一丘を下りて一孤屋を得王家店と云ふ是れ前夜馬賊來襲の處なり人あり前夜の事を說く詳かなり曰く前日一士官六騎を率ゐて琿春より來宿す護送する所の銃器彈藥は車載して庭上に在り一人をして終夜警護せしむ夜半人あり門を叩く番人門を開けば馬賊直ちに刀を拔いて闖入し番人の頭を斬り銃を放ちて之を劫かし數人又屋後より亂入し火を放ちて家を燒き遂に後裝銃十挺連發銃九挺洋刀十把彈藥三千發及び婦女二人を奪ひて去り而して絕ねて金銀を掠めず後之れを檢するに九歲の小女銃丸股に中りて殆んど死し驛馬一頭馬三四頭賊丸に中りて斃る賊は蓋し二十四五人一微傷をも受けず而して護送の一士官六騎兵も亦皆健全なりと咄々怪事と云ふべし此を去る數百步一小店あり小憩す時に步隊數十人も亦來りて休憩す是れ馬賊を追跡して山下に至り獲ずして歸るものなり此の步隊皆號衣をも着ず士官と覺しき者もなく思ひ〳〵の洋銃を携へけり平原を過ぎ深林を穿ちて行く護送士官兵卒等曰く深林幽邃注意せざる可らずと左顧右視恐怖措かず又行くこと廿五清里午後四時退博站に達す此の驛人家三四十商戸あり山中の一大驛と爲す步隊一哨を駐めて盜賊に備ふ驛舍は新築中なるより去りて民家に投ず民家門前に筆帖式の揭示あり賣淫と賭博とを禁ずる者なりさて內に入れば賭博嚴禁の揭示を見渡しながら群集して博奕なし居けり此夜雷雨至る

意氣松站

十九日午前七時半發程山谿を行く雨後溪水路に溢れ奇岩磊々騎行便ならず行くこと三十清里遂に一山を踰えて一寒村を得人家五六戸荷車は輸蠟を涉りて破損しけるが此村幸に一車あり代ゆることを得けり又輸坂を上ること大約七清里

凡そ一千百尺遂に嶺上に達す嶺南の諸水皆寧古塔河に入る寧古塔河一に虎爾哈河と云ふ寧古塔より北流して三姓に至り松花江に會す嶺上一小屋あり即ち是れ吉林左翼洋裝隊の屯營にして歩兵五十人あり亦盜賊に備ふ隊長を記名副都統花翎拉利巴圖魯連祥と云ふ巴圖魯は天子特に功臣に賜ふの稱號にして記名副都統は八旗の少將相當なり而して其實は百人一營の長に過ぎず(前村の一哨五十人此の分遣なり)護送兵二人此に至りて交代隨伴す山を下りて行くと二十五清里、山下に一小屋を得胡家店と云ふ店大にして且つ清潔窓に玻璃を用ひ、洋燈を吊せり滿洲三千清里間如此き者なかりけり小憩又發し行くこと廿清里午後五時半、意氣松站に投ず山中の一寒村にして人家數戸驛舍に兵卒十人を分屯して盜賊に備ふ此の驛に至りて始めて吉林將軍の命令已に至れるを聞く前日來到る處の各驛未だ命令を受けずして車輛をも出さゞりしは僞なりけり此の邊盜賊出沒するより人情自ら險なりと云ふ此の日隨伴せしは歩兵なり淺黃地に白緣を取り胸背に滿洲字にて兵と記したり動作紀律あり能く任を盡しけり其兵を觀て其隊長の人となりを知るべし

鄂摩和站

廿日行くこと三十清里午後一時鄂摩和站に投ず此驛は吉林寧古塔間第一の大驛にして馬隊一哨を屯して盜賊に備ふ此の日銀錢を交換し米、砂糖等を買ふ肉と野菜とを得んとするも無かりけり第一の大驛すら肉菜なし其他知るべし

始食青菜

廿一日鄂摩和站の村外の小河に橋あり橋頭路分れて一と爲り二は直に琿春に達する者一は寧古塔を經る者なり寧古塔道を取りて行くこと三十五清里の間は樹木森林なく眼界開濶なり又行くこと二十五清里森林蓊鬱たり此の間人烟尤少く唯三小屋を三處に見しのみ午後二時半搭拉站に投ず此の日一大隊長解隊の爲に吉林に歸る者此の驛に宿しけるが一妻一妾僕從甚だ多く護衛兵二十名許を隨べけり中佐の護送士官請安(御機嫌伺)の禮を爲さざる可らずとて折手本の如き赤唐紙の履歴書と名刺とを通じて後面謁し又率ゆる所の四兵をして拜せしめけり翌二十二日、十里一小屋あり、又十里、一小嶺を踰えて一小屋あり又十里山を踰ゑて山下一小屋あり又行くこと十七清里一小屋あり其外一人家を見す午後二時半必爾罕站に投ず此の日過ぐる所の林間に芝蘭花開き清香人を襲ひけり此の驛人家僅に十戸嶺下溪間に在り溪聲潺湲心耳俱に清し此の日始めて青菜を食するを

得たり

白日劫掠

二十三日雨あり此の朝村人の物語るを聞けば今朝一旅客二輛の車を携へて此を去る遠からぬ河の彼方に來掛りしに二賊の爲に劫かされ二車の財貨盡く奪去られたるを一村人只今見物して歸れりと云ふ隣人の頭痛を見るよりも平氣なり斯る事は珍しからぬなるべし昨日中佐將に此の驛に達せんとするや途上にて二人の旅客路傍に腰打ちかけたるを見て何者ぞと問ひけるに琿春より來りし勇なりと云ひ營官頭領等の姓名をも告げゝるにぞ中佐も護送士官も勇とのみ思ひけるが今此の話を聞きて其人物を思ひ合すれば曲者は必定彼の二客なりけり午前九時發程行くこと六十五清里山を踰ゆる者六途中雨ふ遇ふ護送兵留まらんことを請ふ大聲激厲して發し午後六時半沙嘛站に投ず此の驛山を負うて流に臨み溪間地稍開け村落點々たり此の日朝來頭痛甚しく途中に小憩せし時嘔吐しけるが直に携ふる所のアンチピリーチ一包を服しければ即時快癒しけり是れグレーク博士の餘惠なりけり

入寧古塔

廿四日午前九時發程行きて山中の一孤屋に至りて小憩す時に四騎兵寧古塔副都統の命を以て來迎ふ又行くこと數里午後一時一寒村の民家に投ず行程四十五清里なり過ぐる所の地樹木少く人家落々たり廿五日午前五時半發程此朝稍冷に寒暖計三度に下る丘陵斷續土沃にして人少し行くこと二十清里一小店に小憩す時に薄冰を見る春寒料峭なり此の間朝夕寒暖の差殊に甚し虎爾哈河の左岸に沿ひて山囲を行く右岸廣野平遠地皆墾闢す吉林以南罕に見る所なり山を出でゝ前面直に寧古塔城を望む遂に城東門内の一旅店に投ず時に午前十一時なり店内に靖邊軍左路右營の步兵數十人下宿せり此地兵あり營なきを以なり副都統は一官吏と四官役とを遣はして接伴給侍せしむ中佐乃ち名刺を副都統衙門に致し明日一面せんことを請ふ此夜副都統又四官吏を遣はして慰問慇懃なり始めて北京總理各國事務衙門の通知を得たるを聞く

寧古塔城

寧古塔城は虎爾哈河の左岸に瀕し四山其外を繞る山を踰ゆて直に露領尼古利斯克に達すべく吉林琿春三姓の道路四通し山間の要地と爲す四山皆峻道路嶮惡但寧古塔城外地開け土沃にして能く穀類を產す城は土と煉瓦とを以て築き四面各

門あり城中副都統衙門電報局等あり市街は門外に在り東門外尤殷賑の地と爲す人口詳ならざるも蓋一萬餘ならん此の地鎮邊軍步隊二營馬隊一營を屯す寧古塔八旗練軍二百五十人は寧古塔琿春間各村に分派して盜賊に備ふ中佐一日此に滯在す着後一日寧古塔の城市を一覽し遂に副都統を訪ふ病を以て辭して面會せず此の日三馬の蹄鐵を代へけり吉林の護送士官に時計一個懷中小刀一把を贈り四兵に銀を與へて其勞を謝す囊中の銀既に盡く此の地露領尼古利斯克を去る遠からず往來貿易稍盛なるより旅店の主人に謀り露貨を以て清銀と變換するを得けり去れども露國の一吊は實に我一吊に中るとて一留錢一吊文に非ざれば交換せずと云ふに詮方なければ百五十留を換へけり

待以賓禮

廿七日先つ副都統衙門を訪うて別を告げ城門を出でゝ行くこと一里許虎爾哈河の左岸に至る吉林の士卒別を此に告ぐ寧古塔副都統は一文官を遣し名刺を致して此に送らしめ且つ親軍六兵をして護送せしむ六兵は八旗練軍の馬小隊なり八旗の籍に在りて六名の内一人は五品、二人は六品、一人は七品の官にして一人は無品なり渡頭舟を呼びて右岸に達す時に河の下流に軍旗二旒を飜へして渡る者あり一營官兵十五人を率ゐて中佐を郊外に送る者なり營官は中佐と路を異にして進むこと大約十清里馬を下りて中佐を待つ中佐至れば名刺を交換し謝を致して別る一小村に小憩し饅頭を買うて發す此の日天晴れ氣暖に寒暖計十九度に上れり土沃地平なるも人烟稀疎寧古塔を去る六十清里將に新官地站に達せんとするや一士官兵十人を率ゐ銃を携へて路傍に整列す中佐至れば士官進みて履歷書を捧げ名刺を呈して禮を施し令を士卒に傳へて曰く請安と士卒乃ち右手に銃を擔ひ一足跪き拜す是れ清國軍隊の禮なるべし既にして新官地站の驛舍に入れば米飯鷄子鷄肉等を準備して饗應鄭重なり此驛以南琿春に至るまで米飯鷄子等の準備あらざるはなかりけり清領蒙古に在りて清國官吏の無狀彼が如く愛琿城以南黑龍江省中を行きて亦不便此の如くなりしは皆護照中驗査放行の文字其累を爲せしに非ざるなし去るに一たび吉林に入りてより將軍復た護照の有無を問はず手を握りて欵晤し兵を出して護送し寧古塔以南郊外に送迎し優遇至らざるなし蓋し待つに賓禮を以てする者なり廿八日午前五時半發程直に一嶺を踰ゆ路甚だ急峻あり嶺上東を望めば則虎爾哈河の水蜿蜒平野の中を流れて風光頗美なり既にして瑪勒瑚哩站に達す時に雨大に至る此地屯する所の一士官士卒を率ゐて來

迎へ履歴を示し名刺を通じて請安の禮を施しけり驛舍に入り準備の米飯鷄子等を食して午餐を終り雨を衝きて又た發す此の邊の村落は數戸一簇村を成すにあらで一里一戸或は半里一戸點々散在し概皆孤屋隣なし寧古塔より琿春に至るまで四百九十五清里間皆然り其間固より商店なければ銀錢を交換する能はず去れども寧古塔の信用ある錢舖より發せし紙幣(錢劵)は村人喜んで領受しけり溪間を行くこと十五清里一人家あり此より嶮阪崎嶇雜樹紛披溪水横溢馬蹄甚だ困めり上ること卅清里山腹の一站に達す之を老松嶺站と云ふ深山中に在り寒驛蕭條たり瑪勤瑚站の外郎の兼轄する所公信官物の遞送に便にする者にして驛に六馬あり一車なし驛員總て六人其一人は則所謂先生にして亦山東人なり

踰踰松嶺

廿九日站外直に一峻阪を上る坂廣さ四五尺僅に一車を通ずるのみ磐石を磨削して道路を造り輪痕深く石上に印して溝を成す實に滿洲道上最嶮惡の地なり然れども之を烏蘭達巴の嶮に比すれば猶坦途の如きのみ上ること六七清里遂に老松嶺頂に達す海面を拔くこと二千七百尺許實に虎爾哈河圖們江の分水嶺なり嶺上老樹蔭鬱眼界を遮蔽す岩石路に滿ち嶮峻鋸の如し時に雨甚し山下泥濘深く馬蹄を沒し騎行する能はず馬を下りて泥中を步す大約十八九清里の間に二小屋あるのみ既にして地形漸く開け道路亦平なり溪川を涉る者數午後一時半薩奇庫站の一孤屋に達す行程四十五清里なり此の驛一兵營あり鎭邊軍馬隊一哨を屯して賊に備ふ此の日氣候稍冷下りて七度に至る此夜哨官來訪ひけり

又踰二嶺

三十日午前八時馬に上りて行くこと數里一水を得河岸に一哨官あり兵十騎を率ゐ軍旗を立て人中佐を送る行くこと六十清里瑚珠嶺站に達す此日嶺を踰ゆる者二、一を拉岐嶺と云ひ一を瑚珠嶺と云ふ瑚珠嶺一に大平嶺と云ふ皆甚だ高峻ならず地は皆黑土雨餘泥濘尤甚し此の間人烟殊に疎に二嶺の間一小屋あるのみ站ハ瑚珠嶺の南に在り薩哥庫站の地味膏腴に過ぎ豆を產して麥を產せずと云ふ

一卒誰何

卅一日午前七時發程行くこと七八里一水を渡る春水暴漲深く馬蹄を沒す左岸の一小營を靖邊前路軍馬隊一哨と爲す亦賊に備ふる者一卒營外に在り中佐を見て誰何して曰く此を過ぐ何者ぞ護照ありや否やと中佐未だ答へず護送兵後れて至

り遙に相語りけるまに行過ぎけり此の地既に琿春の管轄にして未だ吉林將軍の通知に接せざるにやあらん左岸に沿ひ東に向ひて兩山の間を行き遂に山腹に上り遙に眸を放ちて眺矚すれば遠近の山或は濃或は淡屏顏嬌然客を迎ふる者の如く一帶の清流平野を縫うて走り孤屋其間に點綴し山容水態媚を馬首に呈し風光絶佳馬を駐めて低徊するを覺えざりけり水は則噶巴里河にして西流して圖們江に入る者なり左折山を上り哈順站に小憩して又發す過る所の地勢平坦土壤膏腴、大小麥高粱小米等豐熟せざるなし此の間朝鮮人の移住民尠からず處々の耕田白衣の農夫を見る途上一兵營あり鎮邊前路軍馬隊一哨の屯する所亦群賊を鎮壓する者なり行程八十五清里大坎子站に投ず此の驛は哈順站の兼轄にして山間の一小屋頗不潔にして先生一人及び大師父等五人あり此の邊冬時寒甚しく溪水氷結車馬其上を行くと云ふ此の夜哈順站より公信を送り來る吉林より琿春に至る者記して曰く日行四百里と吉林より大坎子站に至る九百二十五清里にして日を經ること既に九日一日平均百三里に過ぎず何の日行四百里かあらん郵傳の延滯往々如此しと云ふ時に此驛以南二驛站の間は山中人家少く小麥麩子等を得可らず と聞き準備の爲に買入れけるが其價は小麥一斗二吊五百文麩子一斗六百文なりけり不廉も亦甚し

圖們江上

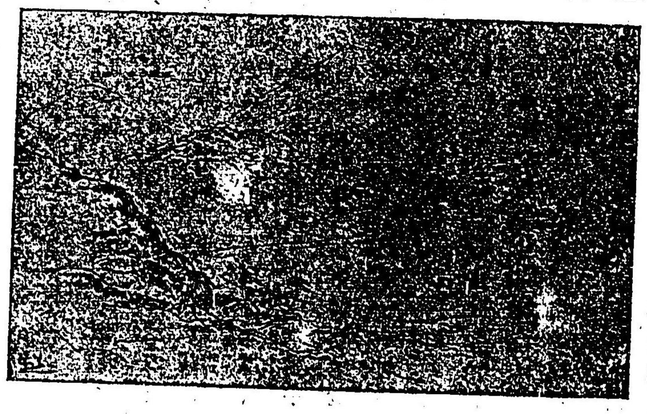
明くれば六月一日午前六時發程嶺を踰ゆる者二前者甚だ高からず後者は海面を拔くこと二千一百尺嶺北三家あり嶺南の一小屋を穆克德和站と爲す密占站の支站にして站內四人あり二人は中佐の爲に山を下りて車輛を率ゐて至る此の驛に入りて又たも昨夜大坎子站にて見たりし日行四百里の公信を見けり曰く馬なく人なく遞送する能はずと午後丘を踰えて一嶺上に達す嶺南溪開きて一水其中を貫ぬき萬疊の山脈其の南に連亙せり水は則圖們江にして山は則ち朝鮮咸鏡道上の群山なり東亞二國の名山大川一望の中に集り殊に爽快を爲す嶺下一小村あり靖邊前路軍馬隊一哨此に屯す哨官進み揖して請安し且明朝發程及び琿春到着の時刻を問ふ午前八時發程午後三時琿春に入るべしと答へければ哨官乃ち一卒をして中佐に隨伴せしめ一卒をして先づ琿春に至りて着發の時刻を報せしむ圖們江の左岸に沿うて行くこと二十清里許兩國の峯巒咫尺相迫り對坐相語る者の如く江水潺々其間を流る水淺くして流急に船を通ず可らず遂に左岸を望めば山腹物あり虱蒙古人の背上を匍匐する者に似たりよく〳〵見れは垢れし白衣を着

清韓二國之山川集于一望之中

たる朝鮮人の短き鍬を取りて耕すなりけり一人家を見ず人家は盡く山間に在りと云ふ此の日行程百五清里午後六時密占站に達す站は一小流に枕す小流は即ち高麗河にして圖們江に入る者なり

入琿春城

二日午前八時發程溪間を過ぎ一嶺を踰え直に圖們江の左岸に至る左折して行く地勢漸開け江南朝鮮の一城を望む此を穩城と曰ふ直に江水に臨み城外草檐數戸あり城と相對して江北一村あり村に琿春水師營あり圖們江上小兵船五艘を繫ぎ旗數旒を翻へせり江水淺くして且つ急固より大船を通ず可らず人烟稀疎貨物運搬の船なし行くこと四十二清里許二破屋あり此の日午後三時城に入らんことを約せしに日猶高きより馬を下りて休憩し午後一時又發す平原の中を馳せ靖邊前



路軍兵營の前を過ぐ路は兵力をもて築きしものにて兩傍並木あり規模整然たり既にして琿春城の西門を入りて午後三時輔友店に投ず主人は元副都統衙門の吏にして昨年職を罷めし者なり市人群集觀る者堵の如し副都統一官吏を遣はし晩餐を贈りて懇に旅情を慰問し且つ曰く請ふ明日臨を賜へと

訪副都統

翌日正午副都統衙門を訪ひ轅門外馬を下りて正門を入れば衙門の官吏數名門右に整列して之を迎ふ副都統亦自ら出でゝ戸外に迎へ握手の禮を爲し中佐を客室に導きけり副都統は湖北省荆州駐防八旗の出身にして天山南路亞克巴の亂頗る軍功あり歷進して現官に昇る文學あり深く外國の形勢に注目し其書齋には藏書數百卷あり案頭に上海板萬國地圖等を置けり吉林將軍は實に滿洲の邊務欽差大臣にして琿春副都統は其副大臣たり又シエルン氏と善し中佐は氏の添書をも携へけり中佐在外七年間經る所の各國情勢及び此行の閲歷をも說きければ深く其艱苦を察し感嘆止まず蓋し副都統萬國地圖をも案頭に置くはさなれば其感自ら常人と異れるなるべし談宗教の事に及ぶ副都統問うて曰耶蘇佛氏の得失如何んと中佐曰各一妙處あり故に久しきを經て傳播衰へず然れども未だ必ずしも

常に世を益せず時に或は禍亂を釀す顧ふに利用如何に在るのみ副都統又問うて曰く孔子の敎以て如何と爲す中佐曰く耶佛說く所來世に渡るも孔子敢て怪力亂神を說かず目前日常の大道を說き人をして卑近就き易く以て邪を去りて正に趨かしむ治世の要此に過るなし宗敎に比して高きと一等と副都統手を拍ちて妙と叫び快と呼びて曰く千古の至論確乎不磨是れ同文の貴國士大夫に非ざれば與に語る可らざるなりと既にして酒至り珍膳雜陳す副都統中佐と臂を交へて談笑城府を設けず副都統又美術を愛し座右日本品の銅器象眼細工等あり曰く天下美術多しといへども貴國に如く者なしと談伊犁戰爭の事に及ぶや起ちて一日本刀を取りて中佐に示して曰く是れ故伊犁將軍金順の遺刀なり將軍年二十二始て軍籍に入り驍勇を以て聞ゆ進むを知りて退くを知らず常に躬自ら士卒に先ちて奮進し此刀を以て賊の首を斬る者勝げて數ふ可らずと中佐受けて之を觀るに長さ二尺餘刀身爛然血痕斑々たり中佐將軍を伊犁に耀かせし所以の者を思ひ感喜交至り慨然たる者久しかりけり其餘日本刀三腰あり其一は太刀なり又露米諸國の新式小銃を藏す皆觀る可き者なり午後四時辭して旅店に歸りけり

與副都統論孔佛耶三聖

伊犁將軍金順之遺刀

市人大驚

翌日副都統一文官を遣はして告げて曰く今日午前十時當に貴官を訪問すべしと十時頃に至りて三發の砲聲を聞く市人皆曰く欽差大臣今衙門を出づと衙門旅店を去ること遠からず待つ者久し一文官又來報じて曰く大臣今城南門を出で廻り東門より城に入るべしと蓋し出入方角を忌ひなり午前十一時親軍步兵二十餘人正裝して刀と銃とを携へて護衛し副都統制服馬に跨り數騎其後に隨ひ鹵簿齊整威風凜々として旅宿の門に入りて馬を下る中佐出で迎へ之を不潔なる旅店內の一室に延き談笑一時聞ばかりにして辭し去りけり初は中佐を見て笑ひ罵り市人之を見て驚かざる者なし

副都統來訪

琿春城中

琿春城は寧古塔を去ること四百九十五清里七百清里と號す東の方清露國境を去る三十清里實に境上の要地なり去れば昔日は駐防八旗を置きしのみなりけるも日本海沿岸數百里の地露の版圖に歸してより靖邊軍大約四千を駐む城は土を以て之を築き副都統衙門電報局等あり四面各門あり東西二門內市廛尤多く雜沓の區と爲す南門外の如きは耕地にして市廛なし人口群ならざるも大約一

境上之要地

萬に過ぎざるべし寧古塔の交通不便なるより衣食雜貨は皆便を烏港に取る故に米及び陶器など日本品多しとなり中佐此に駐まる者二日、北京駐劄大鳥公使、及び海蘭包のシエルン氏に向て安着の電報を發す此の地の電報局長は天津の海軍學校に在りしものにて善く英語を操りけり此地近時新に繁華に赴きし地なるより錢鋪なく銅錢に乏しく賣買は皆銀片を碎き一々秤もて量りて取引す不便尤甚し又露貨二百留を清銀に換ゆ僅に七十六兩六錢六分を得けり四日寧古塔より送り來れる兵六人に銀を與へて其勞を謝す

滿洲雜話

馬賊之猖獗殆不可制

○馬賊

滿洲の野に出沒して恣に奪掠を行ひ以て吏民を害する者は馬賊なり當路の人一時剿伐盡く肅清に歸したりと爲す者の如きも處々蜂棲して今猶猖獗殆んど制す可らず而して吉林省賊最多し其巢窟を吉林寧古塔間の小白山と爲す小白山俗に土山と云ふ寧古琿中に割居し連發銃後裝銃及び短銃利刀を蓄へて勢を養ふこと日久しく斥候を城市に放ちて錢穀兵器の轉運を偵知し或は三四人或い三四十人群を爲して山を出て擊襲奪掠水陸を論せず甚しきは山下の民をして年々貢物を山中に納れしむるに至る白日横行無人の境を馳騁するに異ならず彼の斥候城中に在る者市廛に開きて晏然賣買居然老商なり誰か其賊たると賊に非ざるとを知らん而して彼等尋常鼠賊に異なる所の者あり一二年前一英人あり琿春吉林の間を旅行せし時日中賊の襲ふ所となり跟伴せし支那人皆殺傷奪掠せられ英人獨幾に身を以て逃るゝを得けり英人の乘馬は英吉利產の鹿毛なりけるが同時奪去られけるに數日を經て賊其外人の馬なるを知り人に託して之を吉林の外醫ドクトル、ゲレーク氏の家に送還せりとぞ又一歐婦あり吉林より柘花江を下りて哈巴羅夫喀に赴く舟中一夜賊に襲はれけるが賊舟に入りて其歐洲婦人なるを見るや一物を奪はずして去れりと云ふ彼れ根據の堅き黨衆の多き斯くの如く帶びる所の兵器精良彼が如く而して絕えて外人を殺掠せず殆んど義理を知る者是豈尋常狗盜鼠竊の類ならんや政府各地兵を駐めて賊に備へ其年々斬獲する所の者亦多く吉林梟首の賊毎年五百を下らず昨年の如きは七八百に上れりと云ふ賊を獲る如此多きも猶且つ其根據を剿けて全州肅清ならしむる能はざる者は何ぞや聞く賊を獲れば訊鞫拷問杖笞交下る杖下の人其苦に堪へず賊に非ざる者も亦自ら其罪に伏して苦を免れんとす罪大小となく苟も賊を爲せし者皆斬りて以て梟首す年々六七百

の梟首中に無率を殺して賊と爲す外は則良民相胥ゐて賊に投し內は則民怨鬱積す其賊の横行を怪しむに足らす滿洲實に清國北門の鎖鑰にして如此し嘆せざる可けんや

○驛舍　驛舍は皆官設なり繞らすに土塀を以し前面一門扁して某々站官廳と云ふ門內三面の屋舍あり左右は穀倉と人夫の部屋あれども概皆敗壞して穀なく人なし正面の扉を開けば中間に一室あり之を公用官吏の宿所と爲す次に厨次に吏房あり厩は驛舍の隣に在り賊往々馬を盜むより厩の塀尤堅牢なり上は庇ありのみ毎夜不寢番を置きて以て馬を監せしむ草は地方人民より收めしめ糧は官之を給す馬牛皆一頭一日給銀五分なり(我七錢許)驛吏にハ官より相當の土地を與へ米麥を給す公用官吏の往來する時は總て其給與中より賄はざる可らず去れば給料足らずして驛馬の給銀を奪うて以て自ら食ひ馬には枯草を與ふのみ馬痩せ衰へて骨立せざるは稀なり故に馬の痩肥を見て以て驛吏の廉貪を知るべし去れども毎驛馬二三頭を擇びて多く草秣を與へ以て至急公信の遞送に備ふ至急公信は日行八百里、其次は六百里、次ハ五百里にして二百里以內は幸便を以て送る然れども日行五百里以上は有名無實にして吉林より寧古塔に至る六百清里に過ぎす而して日行六百里の至急公信十二日を費して達するを得るは事實なり去れば日行五十里に過ぎず以て驛傳の不完全を知るべし

食物

○食物　日暮驛舍に入りて火鉢に掛けし黑藥鑵の湯は勝手に貰ふを得るも茶及び土瓶は自ら携帶せざる可らず各驛にて買得べき食物は老米、麥粉、小米、豚肉醬油鹽等にして商店ある地に入りては素麵、豆素麵、豆腐等をも得べし但野菜は到る處極めて少く荒村塞驛殆んど見るを得可らず

草秣

○草秣　滿洲に入りて尤困難せし。は草秣なり愛琿より齊々哈爾に至るまでは燕麥を準備しけれども齊々哈爾以南燕麥既に盡きけるより粟に麩子を雜せて與へけるに馬熱發して尿濁れり因て蕎麥を煮て與へけるに馬好んで食はず高粱は粒のまゝに下りて消化せず因て粟に熱湯を注ぎ麩子を雜せて與へけり草も亦得る能はざるに至りて枯草を與ふ枯草とは粟稈を寸斷したるものなり斯く食物に慣れざるが爲に馬いたく疲るゝのみならず高原の地飲水尤惡しく井戸の水とても穴を掘りしのみにて井戸側もあらざれば濁水混入して不潔言ん方なく且つ氣候頓に變じて寒地の馬忽ち暖國に入りしより疲困益加ハりけり

生產

○生產　滿洲の野各到る處地沃草肥ゑて尤牧畜に適するも人牛馬羊を牧す

を知らず茫々たる芳草荒涼に委するのみ而して豚に至りては實に其名產なり城市村落到處として之あらざるなし數十群を成して路上に囂々たり黑龍江省は八旗の一族に非ざれば居るを得ず彼等は農業に慣れず是を以て地尤闢けず吉林省に至りては旗民雜居の地なるを以て土地墾闢農業尤盛なり產する所の者は粟、豆高粱等なり粟稈は馬に與へ高粱稈は薪に代へ瓦に代ゆ山間の地又麥を產す而して全洲米を見ず吉林省の一部米を產する所ありといへども全滿洲の面積より見れば數ふるに足らず城市に入りて商店賣買する所の物を見るに日本品は米陶器乾海鼠等なり

○旗人　八旗は實に世襲の武人にして猶我舊時の武士の如し世祿を食みて軍役に從ふ去れども副都統の子必ず副都統と爲り甲兵の子甲兵を以て終るに非ず貴公子も亦甲兵(一名驍騎)と爲り甲兵も亦拔擢將と爲るを得べし古制洵に善し因襲の久しき豈弊實なからんや滿洲八旗支那人と婚姻相通せず駐防の地邸宅相連りて自ら一郭を成すこと猶我武家屋敷の如し昔時の盛なりし想ふ可し今や支那人と同住二百年習俗漸く移りて滿漢殆んど辨ず可らず長毛賊以來非常の貧困に陷り駐防の武人賤業に從事して以て纔に口を糊する者あり昔時亞細亞を震動せし韃靼騎兵の威風地を拂うて索然たり近時八旗を選練して俸給稍裕なる練軍あり教養宜しきを得ば祖先を辱しめざるに庶幾からんか盛京吉林の二省旗民雜居の地は將軍地方長官を兼ね軍制を以て統治すること稍悉比利諸州と同じと云ふ其他軍制の詳は中佐固より語らず予も亦問はず

○問答　過る所の國各問答の語を異にするも一國の問ひ人々皆同じかちざるなし獨逸を過ぐるや如何なる寒村僻邑に入りても途に老人小兒に遇うても少佐健康の旅行を爲せを叫ばざるはなかりけり教育の普通新聞の廣布を知るべし露國に入るや細民は無頓着にして何者とも知らず稍事情を知る者い皆馬は何國の產か日本まで乘通すか日行幾里ぞ馬倒れなば何とかする草秣は如何んなど問ふ露人の性冒險を好む故に其言欽羨の意を含まざるはなし蒙古に入るや先づ乘馬を見て良馬なり我馬と交易せんと云ひ金は眞鍮と同一視して驚かざるも白く光るものを見れば以て銀と爲して慾心勃々たる者の如く携ふる所の食物を見れば「饅頭を與へよ」と强請して止まず又「何汗なりや」と問ひ「日本汗なり」と答ふれば目を丸くして奇異の思を表す全蒙古日々皆然り滿洲に入るに及びては群集して先づ衣服及携帶品を看一看し「何國の品ぞ名を何と云ふぞ價は幾何ぞ」と問ふ滿洲人の

天性物を見て價を問ハざるなし各國間答の語異なりといへども一國一州各皆同一にして日々同じ事を繰返さゞるを得ず日本に歸るや逢ふ人毎に「嘸困難なりしならん何處が尤困難なりし何事か尤愉快なりしと問ふ」同胞兄弟の同感を表する誠に自然の至情なるべし

彼我同文。同情自深。

○同情　滿洲我と一葦帶水の隣國なれども細民に至りては名乘らざれば日本人なるを知らず中以上の人に至りては我と彼と同文の國なるを以て同情自ら深く俗を交へて懷洽胸襟を披き易く他の城府を設くるに似ず善隣の情自然の道なり時に無禮を加ふる者あれば汝孔子の道を知らざるかと叱せんに忸怩たらざる者なし彼と學問を論せんにも經濟地理の論絕ねて耳に入らず予は嘗て孔子の書を讀み又八旗通誌大清會典を讀めりなど云へば俗耳を驚かすに足る彼等尤數の大なるを喜ぶ故に或は萬卷の書を讀めりと云ひ或い皇統連綿三千五百五十餘年と云ひ伯林此を去る四萬里と云ふの類皆彼等の肅然耳を傾ぶくる所以の者なり其人文の度以て知るべし畢竟我同文情俗自ら近し行路難を歌ふを用ゐず

四踰國境

五日午前八時副都統を訪ひ刺を通じて別を告げ將に辭し去らんとするや官役來り報じて曰く副都統將に衣を改めて出でゝ見えんとす請ふ姑らく之を俟てと既にして中佐を書齋に延き快談小時遂に一葉の寫眞を贈る此の寫眞は吉林將軍長順嘗て閔兵の爲に琿春に來るや露國軍隊も亦請うて數名の士官を派出せし時清露二國の將士同寫せし者なり中佐辭して出で直に城を出でゝ琿春河を渡り行くこと十五清里許二道河子の騎營に休憩す營南砲臺あり國境に對する防禦なり此の日副都統格別の好意を以て親軍騎兵四人をして送らしむ騎營哨官亦部下の騎兵三人をして送りて國境に至らしむ營外馬首漸く仰ぎ上ること十五清里一丘陵の頂に達す茶店あり繞らすに短墻を以ず墻內に一銅柱あり之を清國建つる所の國境表と爲す琿春の電線此に盡く電局を設けず一朝の變に備ふるなるべし遂に四たび清露の國境を越えて丘を下ること八露里許露領琿春哨處に達す露國烏蘇里哥薩克騎兵一中隊の屯する所なり時に午後一時先づ騎兵中隊長を訪ふ中隊長曰く既に在黑河の友人より電報を得て貴官を待つ者久しと延きて其官舍に宿せしむ此の日中隊長と與に近郊を遊歩し中隊士官と同じく酒場を的と爲して射的を試み夜に至りて中隊士官四人と中隊長の家に會食しけり

清露之國境

望二日本海一而郷思油然

六日午前八時發程哥薩克騎兵一中隊送りて大約十露里外に至る士官數人猶送りて同じく行く時に馬を丘上に立てゝ遙に一泓の水を右手に望む之を問へば則ち波西灣なり中佐波西灣の水は即ち日本海の水よと思へば故郷を念ふの情油然として起り惆然として首を回らす者久しかりけり此迄は只管過る所の地理形勢に眼を注ぎ軍制風俗に心を留めて故郷を思ふの暇なく命をだに惜まねばまして携ふる所の物品も持ちあぐみては路に打棄てたりけるが始て馬を日本海岸に立て、故郷の漸く近きを知ると共に歸心中に動き旅囊中の物も紀念の爲に持歸らばやなと思ふ心も起りけり誠に誰しも免れ難き人情なるべし又も鞭を揚げて進めば左手に煉瓦造の家幾棟かを望む乃ちノヴオキエブスクの市街なり時にノウオキエブスク駐在各隊の聯隊長悉皆騎馬して來り向ふ琿春哨處の士官此に至りて別を告げ二名を送りてノウオキエブスクに至る此日砲兵實彈射擊演習あり廷廻して砲兵の陣地に至りて射的を目擊し午前十一時ノウオキエブスクに着し歩兵第八大隊長の官舍に誘引せられて饗應を受けゝり此地には戰時編制の歩兵三大隊野砲兵二中隊山砲兵半中隊を屯し國境弁理委員を駐す中食後各隊長を訪問し又同委員を訪ふ此の地兵營の外は二三商戸あり其他は擧ぐるに足らず支那人殊

に多し近傍村落は皆朝鮮移住民なり朝鮮村落中一學校あり露語を以て子弟を教育す此の日河井某來りて安着を祝す某は此の地に商業を營む者なり翌七日午前八時發程す第八大隊長及び副官等馬に鞭ちて數里外に送る川あり橋を渡れば則草原なり毎年夏期に至ればノヴオキエブスクの歩兵三大隊砲兵二中隊半琿春哨處の騎兵一中隊波西の歩兵一大隊及びバラバシュの歩兵一大隊騎兵一中隊此に野營を張ると云ふ原上にノヴオキエブスク在留の日本人五人あり歡呼して中佐を送る大隊長い此に別を告げ副官は送りてグラドコバ驛の一軒屋に至る行程二十五露里なり此間の道路は皆兵力を以て修築せし者丘陵を上下するも傾斜緩漫馬車を通ずべし午餐を終りて副官と別れ猶行くこと二十八露里午後七時リヤザノバ驛に投ず

征途樂事

八日午前八時發程丘陵を過る者十六露里スラビヤンスカヤに至る此處はノヴオキエブスクを以て國境鎮臺の地と爲すの前多く兵員を屯せし處なるが今は只ノヴオキエブスクの歩兵一中隊を分遣するのみ中隊長中佐を延きて饗應懇切なり午後四時再び馬に上る中隊士官二名騎馬して隨伴すること二十二露里午後八時

チエルコブスカヤ驛に投す此の驛山間の一孤屋のみ士官携さふる所の豚肉と中佐嚢底の黒麺包とを食して眠に就きけり翌九日午前八時程に上る道分れて二と爲る一は本道にして平なれども遠く一は間道にして急なれども近し近き者を取りて行く西に向ひ北に轉じて溪間に入る此の邊土地豐饒にして村落處々に散在せり皆朝鮮移住民なり既にして一小山嶺に達して小憩す馬を下りて草を藉き士官携ふる所の小銃を取りて射的を試みけり亦是れ征途の一樂事なりけんかし、既にして山を下り午前一時バラバシュに達す騎兵中隊長中佐の至るを聞き士官數騎と與に出でゝ營外に迎へ之を將校團に延き待遇尤悃なり此に歩兵一大隊あり大隊長は病を以て來會せず一中隊の騎兵は知他なる後貝加爾聯隊の分道する所にして中佐の乘馬烏蘇里は此の聯隊に獲たる者なりけるより一層の悃遇を受けゝる

天涯歡迎

其翌十日午前八時馬に上る中隊長及び一士官送りて十露里外の地に至る又中佐の爲に中隊車一輛を出し騎兵二名をして隨伴せしむ山を踏ゐて行くこと二十五露里シロトバ驛に小憩す此日天晴れて氣暖なり過る所の林間峰巒群飛し人馬俱に苦しむ午餐後直に山を上る既にして山嶺に至り例の如く馬を下りて徐歩しつゝ林間を過ぐ時に緑樹啼鶯の下に事を留めて一白旗を翻へす者あり近づきて之を觀るに何ぞ圖らん旗には歡迎の二大字を記し車傍の三人帽を脱して中佐の安着を祝せんとは三人とは誰ぞ烏港在留本邦人の總代丸山中川の二子及び予なり中佐思ひもうけねば此は夢かとばかり打喜べるも道に胸迫りて言ふべき言葉なく此方の三人も喜極まりて涙落ち互に面を見合ふのみなり其後中佐常に人に向て當日の情を說き唯夢心地なりきと云へり殆んど生命をも賭して立出でけん旅路恙なく四千里の山河を踏盡して故國を一葦帶水の外に望みつゝ同胞歡迎の聲を天涯に聞く左もありけんかし遂に相伴ふてイサエバ驛に投す此の日行程三十八露里次日ラズドルヌイ驛を過ぎてシュトロワヤ驛に投す行程四十露里翌十二日又行くこと四十露里相伴ふて烏港に入るイサエバ驛以南の事歡迎記に詳なり（本年六月廿四日掲載）故に略す

喜極涙落。恍然如レ夢

舟路歸朝

中佐馬を烏港に駐むる者三日、六月十六日を以て東京丸に乘り歸朝の途に就く朝鮮元山釜山を經て長崎に着し始て故國の土を蹈みしは此の月廿一日なり翌廿二

日馬關を經て廿四日神戸に抵る各地歡迎の實況は余が歸槎日記に詳なり尋で大阪名古屋横濱を經て此の月廿九日京に入る到る所各地歡呼謳歌して郊に迎へ堂に引き老幼相扶けて觀者路に滿ち或は物を贈り或は像を刻して蓋世の壯圖を賞し絶群の殊勳を贊せざる者なし當時都鄙新聞叙寫漏さず故に之を畧す

入京拜闕

廿九日中佐京に入り未だ征裝を解かず先づ宮城に入り闕下に伏して　天恩を拜謝し退きて東台山下の歡迎場に至り都門人士の祝盃を受け榮光身に滿ち征衣香を帶びて家門に入れり世皆其大體を得たるを稱しき

天恩優渥

是より中佐の横濱に至るや我が叙聖文武なる　天皇陛下は侍從米田虎雄を横濱に遣はして之を迎勞せしめ玉へり　天恩の優渥今古見ること罕なる者中佐の功高く勞多きに因ると云ふと雖も未だ嘗て陛下の尚武愛材の聖旨に出でずんばあらず六軍の貔貅誰か感泣せざらん更らに勳三等に叙し旭日重光章を賜ふ蓋し異數なり七月三日　陛下中佐を召して謁を賜ひ過ぐる所各地の形勢を問はせ玉ふ越ねて四日　東宮殿下も亦召して坐を賜ひ下問する所あり中佐國を拔きて指陳

拜謝天恩

迎勞

謁見

叙三勳三等ニ賜ヒ旭日重光章ヲ

陪食

し詳に宇内の形勢を聞す嘉賞並に至る辭して而して退きて興安亞爾泰烏蘇里の三馬を御廐に獻ず嗚呼三馬の蒙古滿洲を過るや枯草にだも飽くこと能はず而して今や其主の功を以て御廐の粟を食ひ悠々以て生を終る馬も亦幸なる哉抑　王政維新以來二十六年文武の士を養ふ者何ぞ限らん偉功殊勳の錄すべき者亦未だ必しも其人に乏しからず而して擧國之を歡迎すること如此く殷に、　天恩の身に及ぶこと彼が如く優渥なる者未だ嘗て中佐の如き者を見ず嗚呼中佐何を以てか此の恩光寵榮に報ゆる所あらんと欲する乎方今我國の威力未だ外に伸びず甲兵未だ内に備らず纔に文明を裝うて獨立を稱するのみ上下心を一にし文武力を協せて國力を養ひ國權を張る此時に在りて而して朝野肯々として太平の夢を貪りて一朝の慮なく士氣日に衰へ國風月に替る豈慨せざる可けんや此時に當り中佐一劍飄然馬に鞭ちて歐亞要地の形勢を察し蠻地を蹈み險山を過ぎ大寒酷暑の中に立ちて一死猶且辭せず遂に能く壯圖を全うして歸朝す腹中の物皆以て我に資す可し其功既に少しと爲さず而して其風を聞く者懦も起ち貪も廉以て士氣を皷舞するに足る勳業洵に大なりと謂ふ可しか然れども中佐たる者豈之を以て自ら足れりと爲さんや氣益奮ひ志益壯んに今日

の得る所の者を以て他日爲す所の者を資し偉勳殊功の今日に倍する者を建て以て國家を利し以て恩光寵榮に報ぶんこと是れ舉國の輿望にして而して中佐の志も亦蓋し此に在り予輩は中佐が今日の壯圖を餞すると共に目を刮て他日の勳業を待つ者なり嗚呼中佐の責も亦大なる哉

單騎遠征錄 終

●附錄

天囚居士

歡迎記

花なき烏拉地俄斯德の空も此頃人の心何となう春めき立ちたり逢ふ人毎に話の種は騎馬旅行者の勇敢に非ざるなく眉目の間に得意の色を示さゞるなし誠に彼は我國の花なりけり春い彼に因て風猶寒き烏拉地俄斯德にまで生じけり問ふ勿れ騎馬旅行者い誰ぞと彼は世界にまで我國の花の香を知らせし福島中佐なり予筆を載せて遠く中佐を此地に待ち其間古碑を荒村に訪ひ國情を邊疆に察し居るもの三閲月餘彼の單騎旅行者は清領滿洲の野を踏破して琿春城中に入れりと の電報に接して心頓に爽快足自ら踊躍其烏港安着を待つこと南窓一枝の開くを待つよ異ならず會ノーキーフスキの河井某至る曰く僕此月六日中佐の將にノーキーフスキに入らんとすと聞き在留日本人四名と與に往て之を迎ふ待つも の多時中佐至らず怪んで之を問へば予は之を新道に出迎へ中佐は途を舊道に取りて既にノーキーフスキに入れりと云ふに遺憾遺方なかりきさてノーキーフス

キ衛戍は士官若干騎兵三十騎を以て之を驅上に迎へ第七大隊長の官舎を以て其旅館に充て優待懇遇到らざるなしと聞きしかば予れ總代として之を訪問し其健康を祝せり衣服垢れ果てつれぜも容貌は肥ゑ太りて温乎たる其容藹然たる其言斯く長途の艱難を經たりとも覺ねざりき翌日中佐は第七大隊長及び士官三人に送られ烏港さして出立しを予輩五人は六七里露許の處に至て之を送りき大隊長及二士官も亦此處より辭し去しが他の一士官は送りてスラヴォンカに至きとなんと物語る其言葉のはし〳〵に中佐の風采を想像して神往に堪へず時にかねて烏港在留日本人の選べる歓迎委員は相議して二人を遣はし遠く六七十露里の外に迎へんことに決し丸山中川二氏其選に中れり予も亦固より中佐の壯圖を欣慕景仰して置かざるもの是に於てか遊意再び起り勃然禁せず遂に二氏に同行せんことを約し中佐がハーキースヴキック號に上る食物及び筆の外携ふる所の者なしラズドルヌイより烏港に至るまでは既に一たび舟路を取りしことあり再遊なれば記すべきはどの事もなし但黑龍灣兩岸の山皆蒼翠滴らんばかり舟頭相迎へて殆んど窗知の如し此朝霧殊に深く帽も外套もしと〳〵に濡れたりしが晝頃より空晴れ渡りぬ客は本船に載せ荷物は支那船十四艘に搭載して引きゆく途にて兩度も引船の繩切れて繫ぎ繼ぐに時を費せしかば黑龍灣壺る處の燈臺下に至りて川船を乘換へし頃は既に午後一時を過ぎたり此の燈臺は海中の一小島角に在りさて綏芬河は水分れて三叉となれり船は其中流を遡る彼の引きもて來りし十四艘の荷船には數多の移住民をさへ分ち載せて帆あげて遡らしむ折しも順風なりしかばいと早し水は低く草は長く兩岸の芳草遠く且平かにして三流皆紆回曲折一洲出でゝ一水窮りて而して又通じ眼界太だ奇時に或い水と船とを見ずして只點々たる白帆を平野芳草の上に曝すを見るのみ移住民は率ね皆妻子を提げたり一眷屬多きは七八人少きも四五人なり過ぎし日本國痢德沙より海路烏港に入りし移民すべて六百餘人一人平均八十餘留を携帶して烏港附近の原野に墓田を求むるよし聞きしが彼等も亦其一部分なるべし男は多く破れたる土耳其帽を戴き上には牛毛かとも覺しき荒毛の鼠羅紗もて腰にひだを取りたるを着てぶだ〳〵したる垢袴に長靴を穿けり女は下に古更紗の裳短き衣裳に羊皮の古びて毛も落ち表も禿げたる外套を着て何れも乳呑兒を抱かざるなく或は跣足或は男のゝなる長靴を穿きたるぞいとも笑止なる定めて至極の貧農なるべし不潔は蠻子に劣らねぜも容貌は何れ

も朴實愚直の風ありて哀に見えぬさて水淺くして舟數砂上に膠しやう〳〵ラズドルヌイ驛に着きし頃ハ午後五時なり

中佐若到の日取さゞかならねば若しや電信技手なぞは知りてや居らんとて丸山氏と共に電信局に至りて問合すれども分らず空しく歸らんとする路にて一士官に出遇へり見れば官て尼古利斯克行の途中深夜第一驛にて見し年少士官あり奇遇とや云はん我陸軍中佐龜島の着すべき時日を知らずやと問へば予ハ嘗て彼得堡に於いて彼と相見たり遼征の途に在るを知れども何日此處に着せんとも知らずと云ふ詮方なければ驛舍に歸る此夜は金巾二ヤルシンを買ひて旗となしテラシゲもて歓迎の二大字を書す明くれば六月十日なり午前九時大隊本部を訪うて副官に面せんことを乞ひ出來れる士官を見れば何ぞ圖らん昨日の人ならんとい導かれて事務室に入り再び例の日時を問へども今猶照會なしと云ふ中佐がノーキーフスキを立ちしは去七日にして翌日はスラビヤンカに一宿せしよしは烏港着の電報にて知れりスラビヤンカより此處までは九十餘露里に過ぎず先は三日路なれば今日明日は必ず着するなるべし兎も角も途中まで出でゝ待んとて辭し去り午前十時驛車を驅りて立出づ往くこと我七八町にして殺芬河の渡頭に至る

川幅は五十間ばかり極寸の鐵鎖一條北岸より南岸に横架せり馬頭船を呼べば前岸より二人の舟子鐵鎖を傳うて至る渡舟は二艘の舟に厚板を載せて四方柵を設けたるが長さ四間半横は二間半もやわらん車も馬も諸共に積み載することを得べし其形は舟橋に似たり船の左舷に二本の木を立て木の腹をえぐりて彼の鐵鎖を貫ぬけり其舟を行るや木の鈎をもて鐵鎖に引かけたぐりつゝ傳うて而してゆく其狀甚だ奇なり途中一村落あり戸數六七戸家は皆丸木を組みて草葺なり其近傍一面の平野は春草茫々として一見沃土と知らる地平なれば墾てにも勞せざるべし處々に露國婦人の赤更紗の裳を飜へしつゝ耕すを見る夫婦共稼は何處も同じ貧民の習なりけり右手の籬の邊に一人の百姓薪を割り居しが予盤を見て官吏とや思ひけん帽を脱して目禮したりさても階級國は似たる事もあるものかな壞れていとも危うげなる一板橋を渡り山字形に凸出せる一丘を越えてイサーエフ驛に至る此處まで二十三露里なり見渡せば人の影もなし去らバ今少し進みて待ばやとて中飯ものして車を雇ひて立出づ人を待つ眼は燒木杭又は並木にも欺かれて遙に立木の影を騎馬武者かと疑ひ若しや〳〵と見渡せる心なかなかに忙はし行くこと七八露里ばかりにして平野盡き馬頭漸く仰ぎて一森林に入る

木々の葉さかえて翠色滴だらんばかりに杜鵑さへ木の間に鳴く鳴く呼不如歸々々予輩は萬里歸朝の人を迎ふるものなり汝も亦歌うてもて其健康を賀するにや但見れば前途一馬車至る御者は加薩克兵なり知りもやせんとて呼止めて問へば中佐の荷馬車なり中佐はやがて此處に來掛らんと云棄てゝ馳去る予蜚雀躍に堪へず踴然として車を下り彼の歓迎旗を木の枝につけ獵銃に結付けて緑樹啼鵑の下に立て三人並立して待つもの少時蹄の音近く聞えぬ銃を荷へる白衣一騎先導し一騎は殿して眞中に玄服の人あり果して福島中佐の加薩克兵に送られて至れるなり予輩進んで其安着を賀し其道途の勞を慰むれば中佐は斯る處にて諸君を見んとの夢心地なりと挨拶せらる情迫りて言葉少きは斯る時の習ひかし一萬數千吉米の長途を蹈來りて遙に故國を千海里の外に望みて島港より九十露里ばかりを隔てたる一森林の中に於て先づ國民が歓迎の聲を聞く知るべし〳〵其胸中無量の感ありしを見れば額より下は赭黒く日にやけ眼のみ爛々として幾艱難に打勝ちたる滿身の金鐵をあらはしたるが黒羅紗の制服は塵と垢と汗とに染められて一種の色をなし軍帽の黄章は禿げて白く袴の赤章も亦黒く染まりて長靴には處々に繼をあてられ實にも伯林を出でゝより十七箇月四百八十有餘日の長旅行の果と見えぬ獨り赫々夕陽に映帶して我帝國の光輝人目を射るものは左胸に掛けたる四個の勳章一は我天皇陛下の賜へる勳六等瑞寶章一は燭逸皇帝陛下の贈與し玉へる赤鷲勳三等章一は白耳義のレオポルト四等勳章一はモンテネグロのダニロ三等勳章あるのみ去ども其綬は赤きも黄なるも垢れ果てたり中佐の馬は三頭なり一は栗毛尤太く逞ましく名を興安と云ふ一は月毛にして名を亞爾泰と云ふ一は蘆毛にして稍小さく名を烏蘇里と云ふ今は烏蘇里に跨り興安は先導の加薩克兵之を牽き亞爾泰は手綱もなけれど我から馳せて從へり今夜はイサーエフに一宿して夜と共に物語らんとて今輩ゝ車に中佐ゝ烏蘇里に一鞭あてゝ綠樹芳草の間に向ふ

イサーエフ驛に入りし時は夕陽漸く紅なり中佐は馬を下りて三馬の背を二つ三つ輕く叩きて終日の勞を慰めつゝ立木に繋ぎて驛舍に入るわざと鞍は卸さず馬の汗未だ收まらず呼吸未だ復せざるうち卸せバ鞍摺の恐あるをもて着後二時ばかりを經て鞍を卸すなりとぞ是れ中佐の經驗より來れるものにして其他馬轡も及ばぬ好經驗多しとなり湯を沸かし茶を煮て砂糖を添へてすゝむれば中佐扨もめづらしきかな予は酒は一滴をも用ひず其代り甘きものは大好なるが滿洲旅行

中砂糖を得ること難く且つノートキーフスキを立ちてより二三日は又も味を忘れんとせし折なりとて續けさまに三四盃を飲みはしたり彼の島港歡迎者の總代人い携へ來し鮭鱒の罐詰など開きて勸むれば彼にお大名の道中となれりとて喜悅眉間に溢れたりやがて夜食もすみぬ中佐は自ら出でゝ三馬に飲ひ又も一燈を圍みて且つ問ひ且答へて夜の深くるを知らず去れども我三千五百里ばかりの長旅先づ何をか問はまし問ひ度き事のみ山々つかへて前後錯綜せり中佐も四百八十餘日の旅路に死生を期せずまして故郷の夢をや去れば本國の事情を問ひたきにも端緒を得ざるなるべし絶えず話して絶えず途切る予は各地歡迎の情況を說きしに痛く打感ける色あり長旅と云ふのみさしたる功もあらぬ身を斯くばかり歡迎せられんとい夢か現か赧顏に堪すとて大息せり蓋し今日迄は斯るべしとは知らざりしなり勇にして且つ謙尙ぶべきかな予又福島中佐歡迎軍歌一冊を懷に取て差出せしに中佐一見して非常の感を惹けり中佐は一時讀過する能はず一葉を讀去ては大息して更に他事を語り又讀ては大息し一冊四頁を讀了するに三大息を以てせり嗚呼彼の大息は地は險に人は野なる蒙古滿洲悉比利を經て人情の險夷を閱し喜怒哀樂の變甚しくして感情漸く過敏なるのみならず冥目報効を思ひ

遂に聲息に發せしものなるべし夜も深しかば寢に就く翌日午前六時茶と麵包とをものして程に上る中佐は興安に跨り先導の一輕騎烏蘇里を率き亞爾泰は手綱なしに從へり蹄塵輕く颯がり鞭影遠く曳き威風凜然草木爲に靡きけり予輩は驛車にて駈拔け移民村を過ぎて綏芬河の渡頭近く來りし時二騎鞭をあげて至るを見る近けは昨日相見し大隊副官なり彼は馬を留めて手を握り中佐の足跡を問へり予輩其程なく來掛るを告げて別る彼は大隊長の命を以て來迎ふるものなり綏芬河を渡りて驛舍に入りしは午前九時中佐は一時間ばかり後れて驛舍の前を過ぎ歡迎の副官に迎へられて大隊本部に至る予輩は驛舍に在りて中食ものし驛車の用意など爲し居たるに副官來り訪うて曰大隊長中佐を官舍に迎へて粗飯を獻せんとす請ふ來りて會食せよと乃ち相伴うて饗宴に赴く大隊長は年の頃五十ばかり同夫人と年の頃十四五なる令孃及び副官は亭主振なり中佐い露語にも通じて應接稍滑なり酒罷みて丸山中川二氏辭して歸るさて此處にても兵卒をして遠く送らしめんと云ふを辭して只一卒の荷物保管を受け午後三時辭して出づ予い大隊長より贈れる荷物車(驛車)に乘り亞爾泰一頭を車の後に繫ぎ中佐は例の興安に跨り烏蘇里は其後に從へり副官一卒を隨へて五六露里の外に送りて別を告ぐ

此より深林を穿ちてゆく林中は虻多く蝟集して人をさし馬をさす予は木の枝を折りて虻車中に入れば之を打殺し一も遂に數を忘れぬ虻の死骸は車中に散亂せり之を中佐に聞く今日は虻の少き日なりと以て其途中の多きを知るべしさて彼の二人追付やらんと振返れども見ゑず驛に馬なかりしにや午後六時チグローウエイ驛に着く此處は山間の一寒驛山綠にして杜鵑亂鳴し溪深くして水聲潺湲たり驛に二客あり皆目を中佐の胸邊に集む黴服敗靴の人數個の勳章を佩ぶ彼等の畏敬疑訝知るべし茶を命じて閑談時を移す二時間ばかりにして二人至る果して車なかりしかば驛にて二時間を費せりとぞやがて日は暮れぬ中佐は三馬を牽きて草を近郊に求む予と丸山氏とは溪流の上を游歩す時に驛の前なる一草舍に歌ふ者あり其音卑にして悽婉なりやがて一醉漢あり一樂器を携へて出來る樂器は長さ一尺五寸ばかりにして其形甚だ奇胴は鱗形にして二絃なり予乃ち二十哥を與へて歌ひ且つ彈せしむ彼れ二十哥を見て首を地に下げ踟躕として彈じて而して歌ふ田舍歌の節いとをかし絃聲は月琴に似て濁れりやがて中佐は戻り來りて馬に燕麥を與へて舍中に入る此より烏港までは四十露里一日路なれば携へし食物は皆盡んとて筍松簟の鐘詰を開き日本醬油をもて汁をこしらへいざとて出せしに夢にだに思ひも寄らぬ故郷の味さても辱なしとて快よく二三椀を吸ひて酒の代に茶を喫す此の夜は一小舍に旅客七八人沓至していと困難なり中に二人三人聲高に罵り騷ぎ居しが一人耳に口つけ此方をさしてさゝやきしに高話は驛に止みたり叫きし一人は戸外にて丸山氏より佩勳者は彼の世に名高き騎馬旅行者なることを聞きしものなりけり今夜我等の部屋と定めしは廣間の次なる四疊半ばかりの一室なり早や夜も深けつればとて十一時過ぎし頃枕に就きぬ翌日拂曉茶を飲みて車に登る亞爾泰は例の如く車後に繋ぎて牽きゆく四露里ばかりゆきて後邊より百姓車を走らして追駈くるものあり既にして中佐の馬に追付くや日本人三人車を飛下りて中佐の健康を祝せり是れ尼古利斯克より歸途晝夜兼行して中佐を迎ふる者なり此の日天氣晴朗なりしかば野路の塵埃烟の如く中佐は予輩の車後に在るをもて蹄輪塵を生じて途上に漲り目に入り口に入り鼻孔に入り鬢を染め髭を染めて黑きもの盡く灰色となるも中佐晏然として馬上に在り餘りに氣の毒なれば車の前をゆき玉へとすゝめれども三馬の行く各次第あり車後に繋ぎし亞爾泰の前に在りては馬承知せず塵や埃は厭ふ足らずとて馬上ゆたかに塵埃の中を打せたり塵

埃とのみ云ひては東京大阪の人は所詮想像し得まじ馬過ぎ車過ぐれば途上二寸ばかりも堆かき土の粉飛然として起るさま旋風の如くいと〳〵すさまじきものなり午後十時前に第一驛近く來掛りて海邊を見渡しつゝ阪を下らんとして見れば驛舍の前に日本人らしきものあり彼等は車と馬上の人とを見て海邊に立出でゝ路上に待つものゝ如し近きて見れば野村川邊二氏が中佐を此に迎ふるなりけり中佐馬を下りて二氏に面す二馬は中佐の傍ゑ立てり予輩も亦車を下りて其後に從ふ時に亞爾泰を繫ぎし予輩の車は駈拔けて鐵道線路を横切り驛舍の中に入れり中佐の傍に立ちし二馬は忽ち亞爾泰の在らざるを見て且嘶き且走りて友を求むれども見えず或は戻り或は進み或は線路に駈あがり狂奔禁ずべからず乃ち彼の車後に繫ぎし亞爾泰を牽き來りて二馬に見せしに悠々として來り相伴うて驛に入たり其朋友相思ふの情人をして泣かしむ彼の三馬友情にさへ富むまして其主に於てをや中佐の馬を視ると予の如し馬は中佐を視ること豈父の如くならざらんや人馬艱難を與にすること久し其馬たり人たるを忘るゝに至りけんも亦理ならずや

驛に入りて聞けば馬なし午後ならではと云ふに去らば荷物宰領に二人ばかりを殘して歩行せんとて野村丸山二氏を殘し予と川邊氏とは歩行す中佐は十時三十分に出立の筈なり予等は午前十時に立出づ深林の中をゆき阪を登り且下りて六露里バかりもきし時五六騎鞭を擧げて來掛る近づけバ寺見杉浦等六氏馬を走らして中佐を來迎ふるなり一時して相別る既にして海岸に出で八露里バかりも來て振返れば中佐は歡迎者に取圍まれて來掛れり十二時三十分クラスムイスノなる川邊氏の店に着け此處まで十露里にして二時間半を費せり此の店ハ川邊氏が露國典獄の許可を得て鐵道工事に使役する囚徒及び移民の需用を給せんが爲に設けし小店なり店の前には十數輛の馬車あり皆歡迎の人にして無慮數十人中に獨逸名譽領事ダッタン氏も見えたり店の後なる海邊には幕を張り「鬼神泣壯烈」「福島中佐萬歳」などゝ記せし旗三四旒を立て幕中の卓には日本酒を置きて中佐の至るを今や遲しと待設けたり午後一時中佐至る歡迎の内外人之を幕中に延き日本酒を酌みて萬歳を大呼して其健康を祝せり中には涙潸々として下るものあり中食して又も立出づ前後に車十數輛中佐は騎馬して其中央に在り名譽と光輝とに圍まれてゆく途中或は草の上或は木の蔭に待受けて歡迎の聲を放つもの其數を知らず一番川の此方ゑ露國の一士官騎馬して來迎へたり要塞司令官は軍隊を

して中佐を郊外に迎へしめん筈なりけるも着到の時刻を知らず今少し前に聞知りてあはてふためき歓迎の軍隊を出さん暇なく士官一騎取敢へず來迎へしものなりけりクラスムイスノより烏港まで八露里一鞭して馳す蹄塵濤の如く輪轟雷の如く道路目を集めざるなし午後五時我帝國貿易事務館に着せり中佐事務官の客堂に入りて　天皇皇后兩陛下御眞影の前に立ちて敬禮を施し首を擧げて拜觀し佇立之を久うして去る能はず傍より之を見れば兩眼涙あり嗚呼中佐の孤鞭單騎悉比利に入るに當りて生死を期せざりしや明なり而して今や彼は生きたり伯林より烏港に至る我三千五百里の長途を四百八十八日を閲して安全に健康に到着し得て拜謁を期せざりし　兩陛下眞影の前に立ちて泣かざらんと欲するも得んや彼が涙は血なり血は大丈夫の命なり一滴千金と云ふべし二橋事務官進んで挨拶し烏港在留日本人が紀念の爲に贈れる小銃を捧げて其笑納を乞へり中佐堂中に立てる歓迎の同胞に向て曰く去年の今月今日は猶カザンに在り夢にのみ兩陛下の萬歳を禱りしが今や御眞影の前に立ちて同胞の歓迎を受けんとは夢に夢みし心地なり況んや紀念の贈物をや感謝に堪へすと彼の銃は二連發の獵銃にして箱は二重なり蓋裏に「單騎遠征壯圖絶羣贈一小銃以銘其勳」明治二十六年六月十二日在露領烏港日本帝國臣民の三十八字を錄したり此の日中佐入湯ず八十餘日目なりとぞ越えて三日在留日本人相會して歓迎の宴を事務館の客堂に張る會する者一百餘人予も亦與るを得たり二橋氏先づ起ちて觴を擧げ遙に　天皇陛下の萬歳を祝し次に寺見氏起ちて福島中佐の健康を祝し觴を擧げて萬歳を三呼す時に近航の俳優數名あり召して技を奏せしむ絃歌並に起り人は舞ひ觴は飛び主客歡を盡して散す

六月十五日興安亞爾泰烏蘇里の三馬を東京丸に搭載す狂暴やせんと氣遣しも三馬皆箱に入れ人一人づゝ箱に附添ひて撫で摩りつゝ釣あげしをもて何の苦もなく積載せたり明くれば十六日午前七時三十分中佐舟に上ぼる予も亦た同舟同室なり送りて至るもの事務官二橋獨國名譽領事ダッタン書記生野村及び寺見杉浦等の諸氏無慮數十人なり初め予が浦潮斯德港に入りしは今年四月十八日にして海上猶氷あり四山皆赭かりしが居るもの六十日ばかり日暖に風涼しく四山蒼翠殆んど別天地の感あり重裘以て來り輕袗以て去る心地ひとすがゝし多謝す新知の友と江山とが顔を開き心を盡して長き月日の間天涯孤客の情を慰めしを、さて舟は八時纜を解く風穏に波靜なり烏港より元山迄は三百十六海里に過ぎず三

十時間にして達すべし此日夕方より翌朝迄霧いと深かりしかども晝頃より晴渡れり元山津前なる月照島畔に入りて三隻の露國軍艦を左舷に見る是れ先日暗礁に乘上げし軍艦ウキチャズの救助に來りしものにしてウキチャズの艦體は半沒し半は水面に在りき舟の元山津に入りしは午後一時二十分なり小澤事務長は右舷の一艇を下し中佐と予とを載せて上陸す前に一艇の至るを見る陰陽の圖に乾坤二卦を畫きし旗を立てたり朝鮮稅關のなるべし漕手は朝鮮人にして吏は獨逸人なり既にして埠頭に上れば宮本領事代理其他有志者數人出迎へ中佐を領事館の樓上に延き茶菓を饗す尋いで居留人有志總代來りて午後八時歡迎の宴に臨まんことを請ふ中佐之を諾す予と小澤氏と亦其招請を受けたり其間に元山村を一見せんとて中佐及び領事館の諸氏と相伴うて立出づ今日は舊曆五月の四日にして端午節前一日なれば幟もしくは鯉の吹流しなど十數旅戸々に翻へれり居留地を過ぎゆくこと三十町ばかり元山村に至る矮屋陋巷道路は則厠にして臭氣鼻を撲ち不潔目も當てられず節句のお肴にやわらん乳も露なる婦人門邊に踞して鮪の頭をちぎりて泥まみれの身を鉢に入れ居たり遂に春城學舍を訪ふ是れ元山の鄕學にして德源府使鄭顯奭の掬むる所現今の敎授を進士金永奎と云ふ掬學の記文に元山爲北方海陸之大都會と見ゆ誠に結構なる大都會なり既にして歸途に就く午後七時元山小學校の校長豊島氏高等科生徒五十人ばかりを率ゐて領事館前に至り高等科生徒をして銃槍の演習を爲さしむ十一二もしくは十三四なる少年がランドセルを負ひ木槍木劍を捧さげて一進一退するさま健氣なり此日晝夜數發の花火あり宴席は商業會議所の樓上に設けられしが八時頃より一百餘の毬燈を點して勇壯なる珍客の至るを待設けたり會議所は規模甚だ大ならざれども二階立の西洋風建築にして樓上一室百人を容るべし宴席には花瓶に數多の花卉を生け數十鉢の日本料理には小さき國旗を交叉したるなど注意至らざるなし委員總代兼に代りて立ち中佐の功を稱え中佐の勞を慰めて且つ今夕を永うせられんことを乞へり中佐簡單に挨拶す其餘二三の祝辭ありて後酒數行耳熱し興至り笑談潮の如し夜も深けつればとて十一時過ぎし頃辭し去て埠頭に至れば滿船球燈を以て飾れる一小船あり是れ有志者が見送の船なり

見送者十數人將に岸を離れんとす白衣烏帽の人追至りて船を呼ぶ之を問へば監理署主事申珩模と云ふ朝鮮官吏の德源府使に代りて來り送るなり曰く久しく中佐の名を聞き之を詩にし之を文にして欽慕措かざりしに圖らずも卑地を過ぎ玉

へりと聞きて明日は幸に日曜なりお尋ね申さんと存せしが今夜此の滿船飾の燈光を見て問へば中佐を送るものなりと云ふに驚き取物も取敢へず御見送申さんとて匆卒來り訪へり半日の閑談を得ざりしは遺憾に堪へざるも今既に威風に接したり復た恨なしとて遂に送りて船に至れり船に上れば稅關官吏獨人某待受け居て別を告ぐ船中再び酒を酌みて人々に別を告ぐ

翌朝五時出帆す元山より二艘の小帆船を曳きゆく此日は海上無事なり日暮るゝ頃ぱひ空やう〳〵曇り雨さへ風に交りて波稍荒くなりまさりしも風雨計にはさしたる變も見えねば梅雨の候には有勝の天氣なりとて皆人氣に留めざりしが曉近くなりて風雨稍加はりて波浪漸く高く船の動搖甚し目覺めて見れば船は進行を停め甲板には人數多立騷ぎたり何事やらんと出て見れば曳船の第一い船躰いたく傾ぶきて荒波高く捲けり此は荷物の積みやうあしかりければ船の動搖につれて一方に片よりて斯く傾ぶきしものなりけり積荷は材木にして甲板には二本の大丸木を積めり傾ぶける方の丸木を切放せしかば船躰稍直りしかども間もなく又も一方に傾ぶきつ因て一方のをも切放せしが遂に直らずやう〳〵傾斜せんさまなり風雨ます〳〵甚しく波浪威を逞くしていと危ふし船長命じて左舷第六番艇を下し二等運轉手本間をして曳船に至て船狀を視察せしむ本間年少し踊然船に上り逆巻く浪を蹴て曳船に至り瞬く間に復命す荷物の展轉動搖せし爲に船腹を破りて一小孔を生じ水入て救ひ難しと云ふ兎角する間に船は覆へりたり乘組員六人は船腹に駈あがりて救助を待てり船長再び本間をして往いて救はしむ彼の覆へりし船の長い年の頃六十ばかりなるが疾く乘れよとすゝむれども部下のものを先づ乘移らしめぬうちは乘らずとて乘組員の盡く救助さるゝを見て後に泳ぎて端艇に上りしとなん既にして本船に移り毛布もてぬれし身体を暖め珈琲にウイスキーを和して飲ましむ予は始て難破船を眼前に見しが其傾ぶけるさま其遂に覆へるさま殆んど大病人のやう〳〵絶息するに似ていと〳〵悲しかりき抑此の船は三菱の雇船にして元山津の暗礁に乘上げし露艦救助の爲に機械人夫を積みて渡航せしものなるが露艦は四五日前の風雨に破碎して遂に救ふべからざるより此度辭して歸るものなりとぞさて一艘は覆へりしも一艘い無事なり覆へりし船をも其儘に曳きゆく速力強ければ綱の切れん恐あるより一時間僅に二哩ばかりをゆき且綱の工合にて折ふし進行を止むいと〳〵齒がゆし斯くて一晝夜は全く曳船の爲に進行を妨げられて洋中にゆきつ戻りつ翌曉に至りて曳

船の綱は切れたり今は詮なしとて覆へりし船は打棄て其二本の丸木と無事なる一艘とを曳きゆく此日は雨も晴れ風もいと靜にして恙なく釜山に着きしは二十日の午後一時なりき岸近く進めば歡迎の旗を翻へせる小船數多漕來る此處に碇泊せる帝國軍艦愛宕の上村艦長は大塚大尉をして准士官以上の人々を率ゐ數艘の端艇を艤して中佐を迎へしむ中佐の大尉の船に乘移るや歡迎の船一齊に萬歳を三呼し船の軍艦前を過ぎるや海兵悉く登索禮を爲して之を賀せりさて陸上の歡迎者は山の如く岸に充ち磯邊に滿ちたり中佐は人もて築ける墻の中を左右に會釋しつゝ過ぎて領事館に入れば北京より歸省の途寄港したる大鳥公使も亦在り此の日或る一團の人々は宴を商業會議所樓上に張りて其安着を祝す予も招かれしも急用ありて東京丸に歸りしより席に列せざりしは遺憾なりき夕方他の一團は中佐を京阪樓上に迎ふ會する者百餘人祝辭及び朗吟等あり中佐謝して曰く人間の生息し人間の通過する大陸を經來れる予に向て斯く歡迎せらるゝは慚愧に堪へず去れども御厚意は肝銘忘れざるべしと歡を盡して散せしは午後六時なりさて東京丸は曳船の都合ありて長崎着の時刻を確定する能はず長崎歡迎者は之を待つ飢渦の飲食に於けるが如きより長崎迄は今夜八時出帆の玄海丸に乘込み馬は東京丸に殘し置きて長崎より再び東京丸に乘移らんことに決し此の夜八時玄海丸に乘移る送る者數十人

船は故國に向へる夢と共に走る翌日目覺めて甲板に上れば霧いと深し十時ごろやう〳〵晴れ渡りて左手に島山二つ三つ見ゆ問へば平戸沖なりと云ふ中佐は始めて故國の山を望めり其の快知るべし五島を右手に見て過ぎゆくとき彼方の島蔭より二艘の小蒸汽船此方をさして來る望遠鏡にて見れば帝國水雷艇第七第八の二艘なり忽にして玄海丸に追付き相並んで馳せつゝ艇中の士官此方に向つて帽を打振りて歡迎の意を表しやがて二艘並行して本船を一周するさま白鯨の走るが如く目覺ましともいさましとも言ん方なく滿船の人覺ずも手を拍ちて快を叫びぬやがて二艇は先導する者の如く長崎に向て去れり一時過ぎる頃船は長崎港口なる高鉾の島山近く來りぬ且見れば島山の上にいと大きなる國旗を立てたるが旗の下に白烟忽ち起りぬ一發忽ち轟きぬ仰げば數個の旭旗中天に翻々たり續て數發の花火あり快言ふべからず既にして船の蛾眉山下に入れり瓊浦の上旭旗を立てたる小船蜘蛛の子を散せしに似たり數多の歡迎者の中に佐世保水雷隊攻擊部司令伊東少佐あり是れぞ曩に二水雷艇を以て中佐を海上に迎へし人な

りける中佐は歡迎委員に迎へられて埠頭に上れば大森中村の二夫人覩裝して出でゝ迎へ各〻花籠を贈る美くしき花の色芳んばしき花の香は中佐の令名と相似たり陸上には折しも降來る雨をも厭はで町々の名を記せし旗幾旒をか押立てゝ貴きも賤きも老いも少きも出でゝ迎ふる者路の兩傍に山を築きたる中を節面白き樂隊に導かれつゝ過ぎて諏訪神社に案内せらる是れ中佐の爲に神事を執行せんとてなり中佐社殿に上りて先づ東の方遙ゑ宮城を拜し故郷信州の諏訪の社と同じ大御神の前に禰宜の打振る鈴の音を聞きて如何の感をか惹きたる嗚呼中佐は始めて恙なく故國の土を蹈めり神の守り玉ひければなるべし社を出でゝ諏訪公園内なる歡迎場に至れば大きなる板屋根を作りて幕を張り早や八百人ばかりも立食の卓を圍みて幾流にも立ち居たり中佐場に入れば家永市會議長立ちて長途の勞を謝し且つ遠征の功を稱えて歡迎の微意を諒せられんとを乞ふとて紀念の爲に長崎市全景の寫眞を贈る宇都謙碩氏は傳代の重寶なる古忠臣菊池武重の軍令書及び千本楢一本を贈る中佐の謝辭終り觴を擧げて散ず予は中佐と共に大森知事の官舍を訪うて浴し且つ飲みて日の暮るゝを知らず大森氏は中佐の故人なり官舍は諏訪山下に在り幽靜閑雅庭樹綠濃に細雨蕭々興味甚多し

日暮市民有志者中佐を招きて宴を迎陽亭に張る予も亦陪す會するもの六十餘人紅裙をして酒を行らしむ夜既に深けて興益〻酣なる折しも東京丸事務長至る曰く船今入港したるが三馬無異なりと中佐の馬を愛する子の如きをもて來て其縶懷を解きしなりさて東京丸は明朝四時出港せんと云ふに去らば今宵は船に歸らんとて辭して大森氏の官舍に歸り支度して午前一時東京丸に乘込みぬ送りて至るもの數十人時に馬關の人三島氏小倉より此處に來りて中佐を迎ふるに會ひて同船す氏は中佐が十七八の頃東京瓜生三寅氏の塾に在りし時の學友なり瓜生氏は當時大學南校の小博士にして塾を麹町富士見町に設けゝるが後大阪專門學校の教師に轉じ將に塾を廢して任に赴かんとす中佐の家固より貧學資給せず衣物賣蹟して粟に餘す所なし時に三島氏も亦在り而して其家稍富む中佐の困迫を見て金を投じて之を救ひけり厥後一別二十餘年三島氏の家道零落して牛乳を小倉に賣り而して中佐は壯圖功成りて令名赫々たり三島氏舊友の成功を聞き己の身に成るが如く雀躍禁せず二子の衣物に麥藁帽子飄然として來迎へしと云ふ故人の情眞に尙ぶべし翌廿二日の午前四時出帆す風波極めて靜なり行て平戸の瀬戸に至る右岸に一艘の小船あり旭旗を掲げて而して待つ蓋し此邊の有志者餘所な

がら中佐を送るものなり至情と云ふべし中佐舷頭に立ち手巾を振て之に禮し
り
六連島を過ぎて將に馬關海峽に入ちんとする時既に午後五時なり忽ち岩流島の
此方に滿船飾したる一小汽船の我船を待つを見る近づきて見れば門司小倉有志
歡迎と記せし旗を立てたるがやがて一齊に福島中佐萬歳を三呼し續いて花火數
發を打上げたりやう〳〵海峽に入るに及びて飾り立てたる歡迎の小船數艘我船
を圍めり船既に門司港に入るや馬關及び門司小倉の有志各來りて歡迎す小倉分
營の長谷川旅團長は其副官をして迎へしめ要塞砲兵の士官は皆自ら來り迎へた
り中佐先づ門司小倉の歡迎場に赴く場は九州鐵道の樓上に設けたり會する者數
十人總代川上氏祝辭を朗讀し紀念として硯海の石をもて造りたる巨硯一面を贈
る中佐立て謝して曰く予は外に在るもの七年即ち七年以前に此門司を過ぎりし
事あり當時此地は一望茫々たる草野なりしに今此繁榮を見て我帝國の進歩に驚
けり殊に門司小倉の有志者は予が僅々山河を跋渉したりとて玆に非常なる歡迎
をして又當地特産の硯を贈らる予は長く肺肝に銘して忘れざるべしと主客遂に
觴を擧げて而して別る再び東京丸に歸れば周防六郡長門二郡の總代香川少佐
あり船に就きて歡迎の意を表し善く打ちたる軍刀一口及び一鐵盃を贈る刀身旭
日と二龍とを彫り一條の秋水罔兩をして遁藏せしむるに足る尋いで馬關有志に
導かれて馬關八幡祠下に上陸す道路觀る者堵の如し岸には兵卒一隊整列して之
を迎ふ八幡祠に詣で祠南の能樂堂に入れば總代の祝詞あり此の日歡迎したる玉
江尋常小學校生徒の總代米澤悅三とて十歳バかりの學童健氣にも群童に代りて
祝詞を朗讀したり彼等は朝に起きて中佐を海岸に待ち雨至れども散せず人の退
散を勸むる者あれば斯ばかりの雨は中佐の艱難に比して屑ならずといつかな
退かざりきとなん感興起の効尚ふべし既にして一同と風月樓に登る此夜歡迎
の宴を張らんとてなり午後八時兼皆席に就く總代祝辭を朗讀し且つ山口縣の高
等官及び附近郡村より發したる電報の賀詞を讀上げ此にめでたき武士の酒盛は
始まれり歡迎委員中に中佐の舊師瓜生三寅氏あり氏は今馬關に在りて商業に從
事すとぞ瓜生氏の門に此の偉男子を出す豈亦榮ならずや瓜生氏梅村と號す酒間
一短冊を賦して中佐に贈る詩畧之斯くて獻酬罷みて絃歌起り興を盡して散せし
は午後十時頃にもやありけん明くれば廿三日午前六時半上船同七時纜を解く馬
關門司の有志者送りて船に至る船壇浦に至れば一隊の兵卒左岸なる燈臺の彼方

に整列して見送れりさて此の日空は曇りしかども雨は晴れ風は靜にして船路極めて穩なり船を挾める群島點々として星羅碁布し蜃烟水雲の中に隱現出沒して時に或は新樹鬱蒼の間に幾簇の漁村を見る布帆も亦島嶼の間に點綴して宛然畫の如し中佐外に在る者七年久し振に此のうつくしき故國の江山を覩て快適夢の如く甲板を徜徉して留連去る能はざ曰く外に在る久しくして釜山の美を知ると嗚呼中佐が去年今日惡疫流行地なる加森比耳摩の間に在し日を追想して今昔を思願せば其感果して如何ん翌朝淡路島を右手に播磨路の名所々々を左手に見つゝゆく和田岬に至て船は色々の旗もて飾られたり午前十時船の神戸灣内に入るや花火は天に轟き奏樂は海に鳴り歡迎の聲は山河を動かせり中佐は歡迎者に迎へられて上陸し予は餅して大阪に歸りぬ多謝す多謝す各地の歡迎者が帝國軍人の功勞を思うて之を歡迎懇待するに吝ならざるを而して此に予も亦各地歡迎の莚に陪するの光榮を有せしを謝す

附錄 終

明治廿七年六月二十四日印刷
明治廿七年六月二十八日發行

單騎遠征錄奥附
定價金五拾錢

編者　大阪府西成郡貢村崎村貳千六百拾番屋敷　西村時彦

發行者　大阪市東區淡路町貳丁目參拾八番屋敷　金川善兵衛

印刷者　東京市京橋區築地二丁目十七番地　曲田成

印刷所　株式會社東京築地活版製造所　東京市京橋區築地二丁目十七番地

發兌元　大阪市東區淡路町貳丁目三十八番屋敷　金川書店（電話架設中）

版權所有

東宮武官長
陸軍中將男爵 黑川通軌公題辭
顧山 藤原懋君編著

勤王列傳 軍人名譽文鑑

大形全壹册 紙數三百餘頁 正價金參拾錢 郵稅金拾錢

附楠公軍教之卷

維新革命の變亂は我邦開闢以來未た曾てあらさる所なり此間身を挺て國難に當り遂に文明の世と爲せしは英雄豪傑の士なり本書の維新革命肥後騷亂西南の戰爭等に英雄傑士が千軍万馬の間に奔走しつゝ相ひ往復し或は時事を建白せし所の書を輯め更に上欄に此等志士の小傳を掲げ當時に身を碎き心を焦せし狀に明にし編尾に楠公の軍教あり讀者をして一讀の下に感奮興起せしむ請ふ速に一讀せられよ

陸軍大臣認可　顧山　藤原懋君著

軍隊教程　改訂兵軍文範

中形全壹冊●紙數五百頁正價金貳拾五錢郵稅金一錢

●本書首メニ勅諭讀法アリ本文ニハ實地適切ナル普通往復文及尺讀文ヲ載セ以テ日常文通ノ模範ヲ示ス其他ハ忠臣義士ノ烈操勇夫健卒ノ苦節名將智者ノ德行古今內外戰況等其數百有餘種アリ一讀感慨起リ再讀英氣興ル而シテ忠臣義士勇夫健卒ノ事ニ至テハ忽チニシテ悲憤鵬ヲ斷チ忽ニシテ切齒腕ヲ撫シ忽チニシテ奇智人ヲ惹パシメ忽ニシテ大謀人ヲ驚カシムル者アリ猶上欄ノ一部ハ亦是壯丁須知ノ條項ニシテ先ツ軍人ノ任務ヨリ起述シ皇國ノ沿革海外諸州ノ兵勢各國兵器ノ優劣平時戰時ノ注意其他攝生警戒禮儀勤務褒賞罰科古今史乘の金言名將智士ノ言行其項亦八十餘種ニ分チ豫備現役ヲ問ハズ我苟モ國軍籍ニアルモノハ必ズ讀マザルベカラザルノ書ナリ

●服制圖及勳章圖ノ鮮明艶美ナルハ前書軍人文範ニ於テ已ニ諸彥ノ知ラル、所ナリ而シテ今又之ヲ改版シ代フルニ美術石版ヲ以テス故ニ其形ノ眞ニ迫ル其色ノ鮮妍ナル之ヲ前置ニ比シテ月瞰ノ差アリ加之ナラズ帽子衣服ハ上將官ヨリ下一卒ニ至ルマデ悉ク其兵種ニ從ヒ之ヲ列載スルヲ以テ其數頗ル增加シ無智ノ者ト雖モ一見其何兵種ノ何官タルヲ辨識スベシ其他村田銃分解圖アリ各兵種營台裝置圖アリ彫刻孰モ鮮明ナリ

●本書之附錄ニハ●步兵操典●砲兵操典●騎兵操典●輜重兵操典ヲ添ヘタリ

日本鳥尾小彌太君題辭　英國グラルド、マツシー氏著述　日本大原嘉吉君譯述

耶蘇基督起原史論

大形　全壹冊
紙數　三百八十頁
正價　金五拾錢
郵稅　金八錢

此書全篇ヲ分テ小說的基督○歷史的耶蘇ノ二大段落トナシ更ニ數千百ノ條項ヲ細別シ之ヲ古學○記號學○言語○神話○歷史○及其他ノ事實ニ照シ一々證據ヲ擧ゲ來テ埃及考小說的ナル歷史上耶蘇無キ事實ヲ闡明シ耶蘇教全体ノ起原ハ基督ハ整々穿破シテ遺ス所無シ此書原ト英國大歷史家トシテ芳名ヲ人名字書ニ列セル大詩人。大考古學者。十有一年間千辛萬艱ヲ冒シテ材料ト證跡ヲ蒐集シテ大成セルけらるど、まつしーカ年々改版十余回ニ及ブモ尙坊間余モノ今ヤ彼邦ニテハ冊ヲ止メズ而モ佛○獨○瑞○露○ノ諸語ニ翻譯セラレ到ル處歡迎ノ聲雷ノ如シ論據確實○材料豐富○文章活潑○一讀直下人ヲシテ豁然感發セシム是レ弊店此書ヲ發兌スル所以ニシテ亦讀者諸君ガ智識上大利益ヲ得所以也。希ハ發行ノ日ヲ俟チ此活書ヲ繙テ百讀千讀セヨ

瑞典フイラン、ジーダー、ザ氏原著及序文
日本神水居士中西牛郎君校閱序文
日本大原嘉吉君譯述

瑞派佛教學

著者在歐二十年在米亦二十余年其間刻苦勵精シテ萬國古來ノ哲學宗教學理學語學ヲ攻究シ昨年萬國宗教大會評議員ニ擧ゲラル氏一旦豁然悟ル所アリ單身獨歩佛教雜誌ヲ發刊シ此書ヲ著ス蓋シ人生問題ノ必須ナルモノ數十ヲ列擧シ佛教基督教瑞典保里教斯干的那維教米洲古教波斯教婆羅門教理學哲學神靈學孔孟諸學ノ代表者ヲ設ケテ之レヲ討究シタルモノ也佛教公論之ヲ評シテ比較宗教學ノ最上乘トナシ教戰世界ノ良武器トナス是レヲ以テ一讀諸教諸學ニ精通スルヲ得ベク一本ヲ購ヒテ萬卷ヲ得ルヨリ勝レリ諸士希ハ愛讀セヨ

大形洋革全壹冊
紙數　八百ページ
正價金壹圓四十錢
郵稅　金五十八錢

印度ダールマ、パーラ氏印度ムヅーム、ダー氏
清國彰光譽氏　米國モーメリ氏　題詞
日本大原嘉吉君纂譯

萬國宗教大會演說集

中形全壹冊
紙數百餘頁
正價金拾貳錢
郵稅金貳錢

萬國宗教大會開會主意會長ホンチース氏の歓迎の辭委員長パッロース氏の同大乘涉フイラン氏の風詞大乘涉ギッボン氏の同博覽會長ハイランド氏の同米國純酒教徒マクケン、ウー氏の同日本佛教徒土宜法龍師　八淵蟠龍師　巖津貫全師　釋三波師　野口善四郎氏の神學不要論米國狂太教徒博士アイズ氏の印度教印度印度教徒ドイザエテ氏の新宗教理想教獨逸理想教徒博士ブロドベック氏の日本ノ基督教ニ對スル位地日本佛教徒平井金三龍華氏○各宗教ノ有神主義英國自由教徒博士ゲアレンナン氏の佛教印度ブラモ、サマヂ教徒ムヅーム、ダー氏の博愛同胞論米國基督教徒博士コーレル氏の孔子教清國儒學者彰光譽氏の神道ノ性質日本神道宗柴田禮一氏の神學者ニ告ク英國實利教徒チャンテ夫人の佛教論者清國儒學者張謇綱氏の基督教ト回教ノ異同耳其回回教徒問士ヒ氏の佛教論遮邏教徒クーリル親王殿下の「いぶる」批評米國理宗教徒博士ブリッケス氏の英國ノ印度ニハ打勝シハ上帝ノ命令ナルチ論ズ在印度基督教師ナガルカル氏の理學及宗教上ヨリ人チ論ズ米國大學教授ダイト氏の不仁教ノ滅ヒチ望ム印度印度教徒ヴイベカナンダ氏の佛教印度佛教徒ダールマパーラ氏の波斯教波斯教徒ヤヤムソナモデ氏の日本ノ基督教ノ現狀及將來日本基督教徒小崎弘道氏の日本ニ於ケル基督教米國基督教徒ハウロース氏の大乘佛教ノ要領日本佛教天台宗原淨實全師の正統派希臘教會希臘教徒大乘涉ラダス氏の佛教ト基督教印度佛教徒ターールマパーラ氏の附錄大會日誌

初編既刊以來三旬ヲ經サル能ニ數千部ヲ賣盡シ一時品切レノ處今回再版ス此書ノ如何ニ活潑爽快ナル如何ニ微妙深遠ナルヤハ諸新聞ノ批評ニヨリテ明也詳ラ陸續聯印シテ宗教大會ノ活波潑ヲ觀ヨ

蘆津實全師題詩大原嘉吉君纂譯

萬國宗教大會演說集續編

中形 全壹冊
紙數 百余頁
正價 金拾貳錢
郵稅 金貳錢

續編目次

●上帝ノ存在○米國基督教師ヒヲイト氏●日本佛教徒出席ノ大理由○日本佛教徒野口善四郎氏●佛教傳道概論○日本臨濟宗釋安藤師●耶蘇教外國傳道全廢論○米國基督教牧師長ブリストル氏●同市俄高新聞批評●日本佛教各宗略史○日本眞言宗土宜法龍師●耶蘇教傳道改良論○印度佛教徒ダールマパーラ氏●ぱいおるノ効用○米國基督教師ヨセフ、クック氏●佛教○日本眞宗八淵蟠龍師●回回教ノ精神○米國回教徒ウエッブ氏●日本將來ノ宗教ハ基督教也○日本基督教徒岸本能武太氏●佛陀○日本天台宗蘆津實全師●科學ト宗教○獨逸哲學博士ケプス氏●日本ノ佛教○日本眞言宗土宜法龍師●宗教大會閉會祝辭○日本渡米四師

續編ニハ我邦渡米諸氏ノ高論卓說ヨリ萬邦各教名家ノ大演說ヲ列載シ縱橫ノ論議恰モ濤怒リ風激スルノ偉觀アリ大方諸士希クハ愛讀セラレヨ

高等女子師範學校校長細川潤二郎君題辭
中島知子著 ●岡野廣鶴女史挿畫●

日本の裁縫と女禮

大形和裝美本
全貳冊
紙數 三百ページ
正價 金四拾五錢
郵稅 不申受

此本は世の少女方の是非心得ねはならぬ裁縫の業と禮義の法とを叮嚀親切に談話の如く書き綴りました者で讀めば直に萬の裁縫を覺ゑ其と同時に起居擧動から平素人と交るの禮義作法も自然と悟る工夫に致しました世には裁縫や女禮の本も多くありますが大抵は實用に遠く其計でなく間違の事も載せて一向充にはなりませんうこで此本は色々と工夫して夥多の月日を積み初めて實地に充て符る樣作り抑糸途の手はどさなる縫針の法から裁方縫方は勿論道具の扱方迄一々細密の圖を加へて叮嚀に手引し禮義作法も亦優美の繪を挿して親切に敎へ凡て五十日間には女子一通りの途を卒業する方法です尙其に洩れたる事柄は附錄として卷末に添へましたから師匠に乏さ地方の方い此本が良師となり學校で時間の足らぬ少女方にい補修の良友ともなり兎も角少女方には極必要です其故女學校や裁縫所などでは賞與品と致すに格別に都合よく是に上越すものはありません論より證據先づ一冊をお讀み試し下さいまし

名倉知秋君編　本版圖八十余個

小笠原流禮式圖解

氏より育らと云ふ事は其人の所行に禮ゐるに依るなり人にして禮を知らざれゝ假令其身富裕に在りとも其舉止自ら野鄙にして品格なし人にして禮無きゝ野蠻の風俗なり下賤言ふ可からず實に禮は人に缺く可からざる者なり近時は洋風に心醉して禮を失ふに至れり是甚だ歎ずべきなり日本は禮法正しき國なるが故に風俗善美なるに非ずや何ぞ此禮法を捨て固有の民俗を廢し風教を不明にし自ら野蠻人と爲るの愚なるや弊店此に見る所あり本書を發行し世の人洋風に心醉せる者の目を覺せんと欲す江湖の諸君本書を讀んで日本の美俗を失はれんとを希望す

大形美本全壹冊
紙數百八十頁
正價金貳拾五錢
郵稅金六錢

神保孝慶君編述

家庭教育 日本地理旅行談

●三府五港石版圖挿入

本書は日本全國の旅行を五畿八道の順序を逐ひ最も平易ある紀行文を以て著述せしものにして少年學生をして興味ある旅行談を說く中に不識不知日本地理に通曉せしむる著者が特色の創意なり加ふるに古今名家の名勝記遊を挿みたれは特り地理學のみならず紀行文を作る一助となるを尠らず希くは大方少年諸君一本を購ふて本書が奈何に有益なるかを知り給へ

中形全壹冊
正價金貳拾錢
郵稅金四錢

學堂尾崎行雄君著 ●寫眞版肖像入●

訂正再版 内治外交

菊判形全壹冊
紙數二百頁餘
正價金四拾錢
郵稅金八錢

強くして自ら其強きを知らす大にして自ら其大なるを知らす是れ本邦今日の最大患害たり邦人既に彼を知らす亦最も己を知らす而して漫然内治外交を說く豈に盲人色を評するに類せさらんや秀靈なる此山河忠良なる此民衆素より以て東亞に虎踞して宇内に雄視するに足れり然り而して時人自ら知らす進取の計を講せすして唯た退嬰を事とし八荒を併呑し四海に號令するの氣を皷せすして却孤城落日寒鴉悲鳴の愁夢を結ふ先つ此迷夢を打破し元氣を皷舞し中外彼我の形勢を審知せしむるに非すんば百計千策悉く一泡沫に歸せんのみ今夫れ此書は學堂先生の近業に就て其萃を拔き其精を選める者にして或は大和民族の靈慧絶倫なるを論し或は歐米諸國の風俗習慣を說き或は外交の秘機を發き或は内治の警策を立つ其記事論說一として國家生民の利害休戚に關涉せさるはなし弊舗幸にして開版發售の榮を得たり江湖博雅の諸君子請ふ熟讀玩味以て是非の批評を賜はらんことを●價直は諸新聞の批評に明かなり

金谷可美男君著

新體 高等作文大全

中形全壹冊
正價金廿七錢
郵稅金八錢

維新以來文學日々に遠ふて盛んに赴き漢文直譯の文體用にて普通の文と爲れり然るに其後陸續出る所の書其文體雅馴にして流暢なるもの殆んど寡く反少て雜駁の文愈々出で、愈々亂れ識者をして文學愈々盛んにして文體愈々亂るゝの惑あらしめたり是れ他なし人々其主とする所の學習其科多くして是れ日も足らず專ら文章學を修むる餘暇なかりしを以て也今や氣運一變し此雜駁文體を驅ふの傾きあり故に此書尺牘より記事論說序跋に至り一々部門を分ち淺深高卑の序次を正しく亦一々名家の作例數百を錄し巻頭には消息文和歌を掲げて假名遣ひ正しからざるを矯む實に無比の作文大全なり請ふ作文に志さゝる諸君速に購讀あらんことを

三宅鼎君著

巻頭 和文高等作文新書

中形全壹冊
正價金廿參錢
郵稅金六錢

本書は高等小學校及び中、師範學校生徒其他初學者の作文を習ふの便益に供せんと欲して其順序若相を正し文章に手拍流暢にして而して當時に適切なる新奇の熟語を用ひて其作例の如きも皆文を裁せす當今の文章家の作りたるものを輯め其間編者の著作にして題の新奇なるものを加へ殆んど十題を記し數種の部門に分ち必要の例題にして之あらざるはなし且つ巻頭には和文の作方例題等を掲げたる書にして從來世に出版したる多くの書中にて最も適切最も新機軸を出したる書なり讀者宜しく人智は日に進み後者は必ず前書に優る事を了察し賜ひて速ちに購讀ざられよ

ニトA
22

梅崖山本憲君著

圖解説明 文法解剖

中形全壹冊
正價金貳拾錢
郵税金六錢

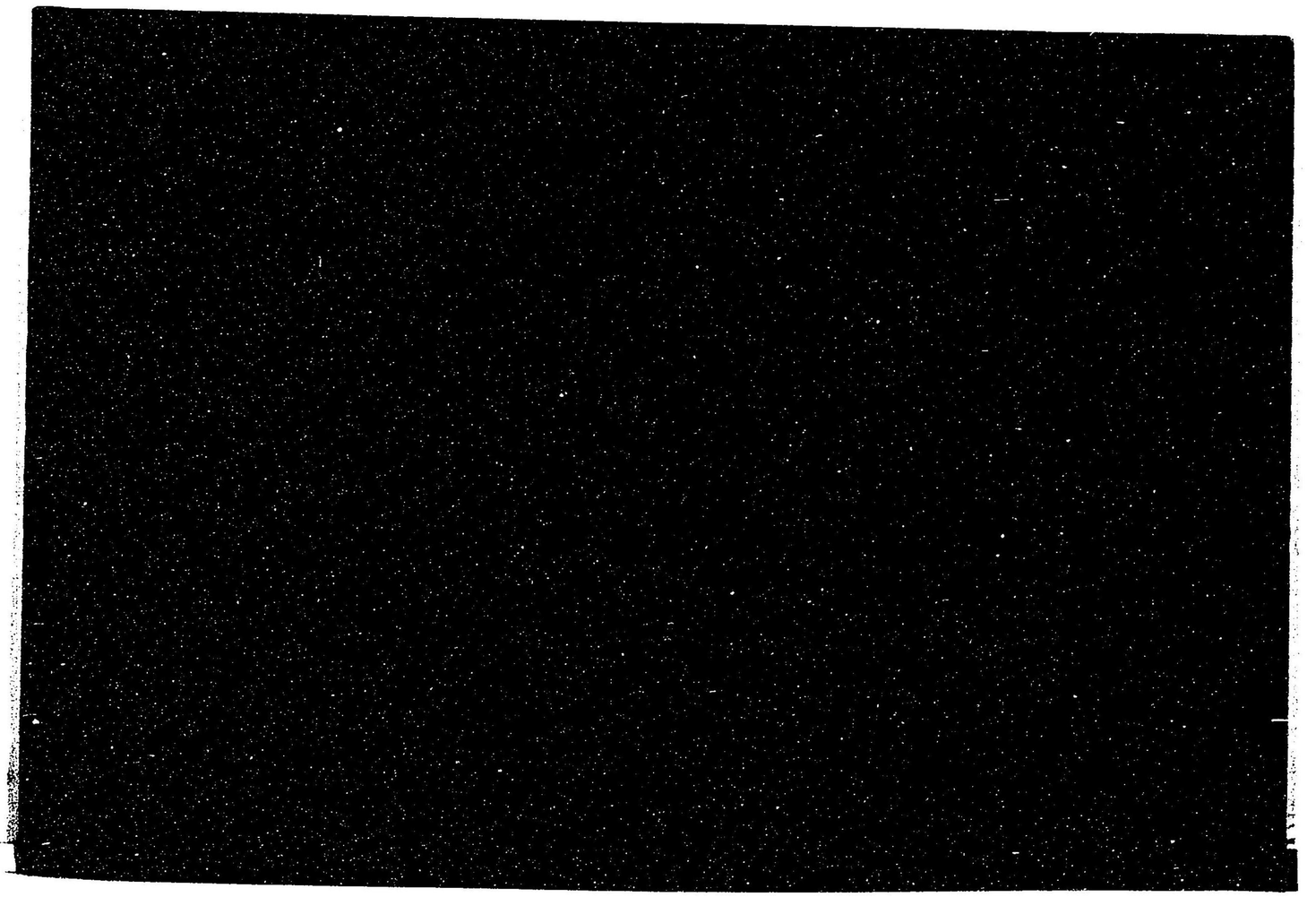
夫れ文章の經國の大業不朽の盛事古より重きを天下に爲す亦宜ならずや本書に則ら儒名師下に嘖々たる梅崖山本先生の著述に係る洵其獨得の一種新案なる圖解を以て丁寧懇切に文理の蘊奥作文の秘訣を解剖的に解釋し加ふるに古文を引例して識左となす苟も斯文に志す者一本を辱ふて指南車となさば釋然氷解自ら文章の奥義を究極するを得るに庶幾らん歟

岡本可亭君著

高等普通 新體婦女用文

中形全壹冊
正價金貳拾五錢
郵税金八錢

從來婦女用文章の書多しと雖も唯だ其一端を記したるのみにして未だ完全なる書を見ず本書は岡本可亭先生時日と潤筆を費し其學ふべき順序階梯を整へ淺きより深きに入るの法に倣し先生得意の筆を以て其文章の巧妙なる文明世界の婦女に適當し加ふるに鑑頭に和語略解、冠辭略解、假名遣、送り假名、百人一首、近世才藝、女大學其他凡そ婦女文章に必要なるものを掲げ實に婦女たる者座右に備へざるべからざる書也



44
267

026771−000−2

44−267

単騎遠征録

西村　天因／編

M27
ADD−0472